第7回
むのたけじ反戦塾
手元資料

■日時 2024 年3月20日（水･休）
13時30分～17時
■会場 文京区民センター
3C会議室

第7回 むのたけじ反戦塾

日時：2024年3月20日（水・休）
13:30～17:00
会場：文京区民センター３C会議室
（地下鉄春日駅2分・後楽園駅5分）
プログラム：

❶ 参考上映：「潟上九条の会」主催講演会
「今の憲法でなぜ悪い 99才
むのたけじが吼える!」
（106分／2013年10月12日
秋田県:潟上市飯田川公民館での講演）

❷ むのたけじ著『**希望は絶望のど真ん中に**』
第4章**「みんなの課題にみんなで取り組む」**
後半 P.144~155

❸ **参加者、それぞれが今考えていること、問題としていることの出し合い・話し合い**
今回は課題として自衛隊、自衛隊員のことをどう考え、伝えるか？

第7回 むのたけじ反戦塾のご案内

「むのたけじ反戦塾」は、昨年12月に第1回を開催して以来、これまで6回の学習会を行ってきました。

むのたけじさんが語り、書き遺された「戦争はいらぬ 戦争をやらぬ世へ」の実現に向けて、その著作を少しづつ読み合わせ、また反戦への思いを語られたむのさんの講演などの映像を一緒に見て、参加した人がその感想を手がかりに、それぞれ自分が今、考えていること、とくに戦争の危機に対して思っていることを出し合って、話し合うという形で進めてきました。

むのさんが始めた「たいまつ」学習会や「むのたけじ平和塾」に習い、車座になって、それぞれが知り得た反戦の情報、最近学習・理解したこと、そしてずっと考えていることを出し合って、共有していきます。

今回は、私たちの「反戦塾」の原点に戻って、憲法について、とくに憲法九条と自衛隊の今をどう考えていったらよいか、それぞれが今、考えていることを出し合っていきたいと考えました。

映像は、2013年、むのたけじさんが秋田県潟上九条の会の講演会で話された「今の憲法でなぜ悪い 99才 むのたけじが吼える!」のお話をあらためて聞きなおします。

そして、いまの自衛隊や自衛隊員のことを、どうとらえ、その危険をどのように伝えていくことができるのかをみんなで考えていきたいと思います。

【この手元資料の内容】

資料❶ 第7回 反戦塾へ P.2
資料❷ 自衛隊についてみんなで考える P.2
資料❸ 「むのたけじ反戦塾」も７回を迎えて、振り返りました（前編）。 P.3
資料❹ 論争「自衛隊を改組し軍縮と防災の実現を図るべき」(週刊金曜日) P.4
資料❺ 自衛隊の原状と問題点、及び市民運動の課題 P.5
資料❻ 自衛隊に対する印象について P.6
資料❼ 防衛力の強化「賛成派」6割超で高止まり P.7
資料❽ 防衛余談概算要求7兆円 これだけの無駄 P.8
資料❾ 自衛隊靖国参拝 戦前からの旧軍意識 P.9
資料❿ 第6回むのたけじ反戦塾（2024年1月20日）参加者発言記録 P.10~21
資料⓫ むの反戦塾のこれまで［memo］ P22
資料⓬ 「戦争いらぬ やらぬ世へ」自衛隊派遣の是非について P.25～24
資料⓭「希望は絶望のど真ん中に」第4章 みんなの課題にみんなで取り組む（後半） P28~26（左開き・裏表紙から）

資料❶　第7回 反戦塾へ

第7回反戦塾反戦塾でみんなで考え出し合いたいこと

「むのたけじ反戦塾」は､むのたけじさんが遺した映像をみんなで見て、むのさんの著作を毎回少しづつ読み、彼の言う「戦争絶滅へ」「戦争を殺せ」をどうしたら実現できるかについて、これまで6回の会を話し合ってきました。
「たいまつ」に習って参加した人は、車座になって一通り、話をする形を取っています。
はじめは自己紹介を兼ねて始めたひとりひとりの発言も、回を重ねていく中で、それぞれが今、思っていること、「何とかしなければ」と案じていることを出し合うような形になってきました。

そうした発言の中には、「確かに」と共感できるモノに加えて「へえ、知らなかった!」と驚かされるものや、「もっと自分でも調べて深めて行きたい」と思う発言に出会うことがあります。

たとえば、第5回の時に出された「韓国、中国の学生は歴史は二本立てで教えられる。通史の他に『近現代史』が教科として別個にある。だから近現代史をあまり歴史として教えられていない日本の学生と話すと、話が食い違うか、日本の学生はほとんど何も話せなくなる」という話。（詳しくは6回目の手元資料10ページK.N.さんの発言参照）
その話を聞いて韓国、中国の歴史教科書で近代の日本はどのように描かれているのか知りたくなりました。またそれが事実だったら、戦争を教えられていないと言われる若い人たちに話していけないかと思いました。
また、前回の第６回の時には、「元旦の能登地震などで、災害復興支援で動員されている自衛隊員の活躍が報道されているのを見ると、彼らを『違憲の存在だ』って簡単に言えるのかと言う気持ちになる。今の自衛隊と憲法９条についてどう考えているのか､みんなの考えを聞きたい」という発言がありました。（7回目の手元資料に掲載K.S.さんの発言予定）
たしかに、私たちは武力が戦争を産むと言う繰り返しを無くすために、戦争の放棄、武器・軍隊を持たないという憲法のめざすものを実現させようと考えますが、現実の存在である自衛隊をどうとらえ、どうしていったら良いと考えるのか、皆さんから考えを聞き一緒に考えて行きたいと思いました。

そこで、次回第７回の「むのたけじ反戦塾」では、今まで通り、それぞれが今、考えていることについて考えを出し合うことに加えて、「憲法と今の自衛隊についてどう考えるのか」と言う設問をあげ、それぞれ考えてきてもらって、出し合う話し合いにしたいと思います。
今の自衛隊については､考えていく材料になるような最近の問題点を、手元資料にも集めておくことにします。

(花﨑)

資料❷　自衛隊についてみんなで考える

「日本の場合だったら、自衛隊を手を突っ込んで、自衛隊を何とかするっていう風にしないと、この軍拡は止められないですよね。」
「つまり憲法と自衛隊との関係っていうのを、どう位置付けたらいいのかっていうことです。
もちろん憲法学者の大半はその自衛隊違憲だということなんだけども、世論調査やると圧倒的に合憲という感じの中で、野党なんかはいろいろ今揺れてるっていう感じですね、あの、いろんな立場があると思うんです。」
「ああいう災害救助みたいなことですね､大活躍みたいなことで、ものすごい危ないところまで入っていろいろやっていますよね、みんなで。そういう人たちに対してあんたたち違憲の存在だねって簡単に言えるかっていうね」
「合憲・違憲論という二分法でいくと非常に難しい問題かもしれないという気がするわけです。 …」

これは、第６回「むのたけじ反戦塾」の中で出た、自衛隊についての発言の抜粋です。他にもたくさんの自衛隊と憲法について考えていることが出されました。（詳しくは、本資料10ページからの「**第6回むのたけじ反戦塾 （2024年1月20日）参加者発言記録** 」をご覧ください。

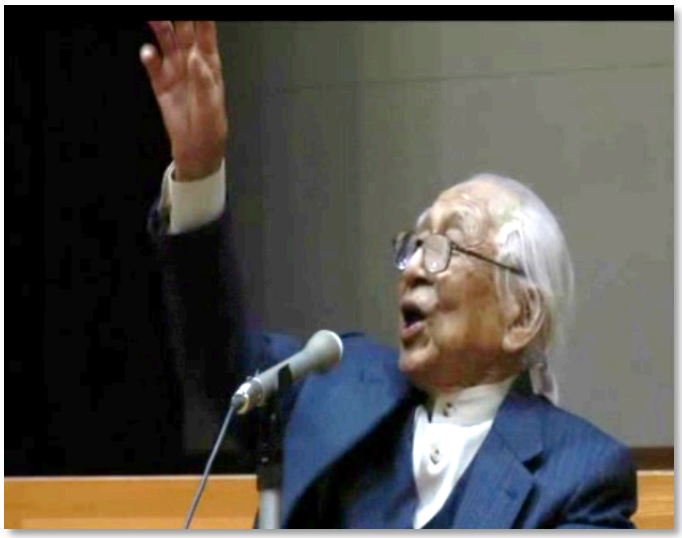
第７回の話し合いでは、そうした議論をもとに、皆さんひとりひとりが自衛隊について考えてきたこと、考えていることを出し合って、できれば他の人にも（若い人にも）自衛隊と憲法について話していけるような話を見つけたいと思います。

以下、私の思いつくままに「自衛隊に対する思い」､気になっていることを書き出してみます。

●自衛隊靖国の参拝問題（本資料９ページ参照）
●高校生などに対する自衛隊募集勧誘の動き（本資料19～20ページの発言）
●自衛隊出身を売りにした迷彩服を着たお笑いタレント
●「土地規制法」によって、米軍基地だけでなく、自衛隊も私たちの敵（かたき）に
●旧軍体質が残っている。あからさまにそれをさせているものは「政治」か
●自衛隊の情報の閉鎖性
●軍拡、敵基地攻撃能力装備党について､自衛隊員はどのような教育をされたいるのか
●報道の偏向。チャンネルによる自衛隊の話題の取りあげ方の違い
●事故にしろ、事件にしろ、後のフォローができてない｡調査報道のような形で粘り強く追っていけないか
……

ではどうすれば良いかと考えながら…
→「歴史に学ぶ」と言うことを徹底する､拡げる
→各地で起きていることをつなぎ､共有して、もっと知らないでいる人に知らせていく、それに利用できるような話、本、映像、番組などを拡げていく
→基本は民主主義を作る、信用できる政治にしていく、個、人間を大切にする自分たちの政治を作り上げると言うことか。
→しなやかな、そしてしたたかな、持続性のある闘いの材料を見つけていく

資料❸「むのたけじ反戦塾」も７回を迎えて、振り返りました



「むのたけじ反戦塾」も７回を迎えて、振り返りました（前編）。

この反戦塾の根は「むのたけじ地域・民衆ジャーナリズム賞」を手伝ってくれていた花崎哲さんの「この賞の冠になっているむのたけじを知りたい、知らせねば」ということでした。そこで、2022年３月の第４回授賞式の前にむのたけじのドキュメンタリー映画と親交のあった佐高信さんの講演会を催したのです。さらに、むのたけじの７回忌にあたる2022年８月21日には「むのたけじと考える憲法」ということで関連するドキュメンタリーを見て、佐高信さん、愛敬浩二早稲田大学教授、造形作家中垣克久さん、立川市議阿部みささんを招いてのパネルディスカッションをしました。この二つの集まりを通して、「戦争はいらぬ　　戦争をやらぬ世へ」へのむのたけじの思いにさらに触れようという声が上がりました。このころウクライナではロシアによる侵略で激しい戦いが行われていたことも重なります。むのたけじが晩年秋田県湯沢市で開いていた「平和塾」にならって、勉強会を開こうということになりました。ただ、今は平和ではないということで反戦塾になります。10月「むのたけじ反戦塾設立準備会」として、映画「笑う101歳×２　笹本常子　むのたけじ」を上映し、その監督の河邑厚徳さんを迎えて、むのたけじを撮った理由などを伺い、むのたけじ反戦塾のスタートを切ります。「むのたけじ反戦塾」はむのたけじの主張である「戦争のいらぬ　戦争をやらぬ世へ」に向けてどうするかを話し合う場を作ることになります。

反戦塾開催のおしらせをしても、どのような中身にするかで悩みはありました。特に準備会で寄せられた、「みんなで話し合うと言っておきながら、それをしていないのでは」という意見は気になりました。準備会のように講演者、パネラーがいますと、その人の名前で人が集まりますし、会もその人が中心に進みますが、一方長い討論時間を取ったとしても発言できない参加者も出ます。参加者みんなに話してもらおうとするなら、むのたけじが出演するドキュメンタリーや講演会の映像だけはと思いました。ただ、討論の参考になるように充実した手元資料を配布することで始めようと考えました。

第一回むのたけじ反戦塾は12月18日に開きました。
講演者なしでどれだけの人を呼べるか、不安の中での開催でしたが、円形に座ると会場いっぱいになる30人程度が集まりました。参加者の中には自分が話すものとは思わずに様子が違うという人もおりましたが、全員が日頃思っていることを話してくれました。このときは、資料としてむのたけじの年表、著作目録、「希望は絶望のど真ん中に」の序章のほかに、亡くなる前年に日刊ゲンダイで語ったことの記事を提供しました。

日刊ゲンダイの記事には今後予想される世界情勢と、それが嫌なら「英雄待望論」ではなく自ら声を上げよ」という内容です。合わせて参考映像としてむのたけじが出演している「日本人はなぜ戦争に向かったか」というドキュメンタリーを上映しました。こうした材料の元に議論をしてもらいました。
討論は自己紹介的ものから始まりましたが、その発言を見ると、集まってくれた人たちの多くがいままでいろいろな活動をして、すでに発言している人たちのようです。その中には今までも心に残っているむのたけじの言葉をあげてくれた人もいました。「子どもに対して子守歌は寝かしつけるように歌われるが、 もっと子どもが覚醒するようにしなければならない」(N.M.)「恋すると は心を変えることである、自分を変えることで相手を変えたいという願望である」(I.K.)と。
また、「交戦権と軍隊と兵器の所持は、国家であることの条件で有り、 資格だ」と「希望は絶望のど真ん中に」の序章に書かれていることを指摘したこともありました。このことは米国にお前たちは国家に値するようなものではないから憲法９条が日本に突きつけられたと言うところでのむのたけじの発言ですが、戦争をなくそうと主張をしているむのたけじらしからぬ発言だと疑問の声があがったのです。とりわけ、岸田政権が軍備拡張を推し進めようとしている時です。後半はこのテーマを中心にして、むのたけじの著書「希望は絶望のど真ん中に」の序章「歴史の歩みは省略を許さない」を参考にして進められました。
参加者の中からも、憲法９条の戦争放棄は幣原喜重郎のアイディアから始まったのだから、憲法９条はアメリカから押し付けられたものではないと言う説を話された方もおられました(C.I.)。だが、むのたけじは歴史的事実関係ではなく、欧米、連合国側が憲法９条をどのように見ていたかを伝えたかったのではないか(M.T.)。それを日本人はただありがたがって、それをさらに強いものにするような努力をしてこなかったことを言いたいがための発言ではないかと。実際、むのたけじは戦場も、戦後の動きも全て見ているわけで、そうした経験からの発言ではないかと。
さらに、９条を生かして平和にするための方策に関連する発言として、むのたけじの「世界は一つになれる。次第に一つになりつつある。 人間が長く地球に生きて行くにはその道しかないと私は感じた」を重く捉える発言がありました(S.T.)。国境をなくして、地球人として生きていくことも良いヒントのように思います。

日本に関して言えば、敗戦時、「ひとつは憲法9条が連合国に宣告された死刑判決だという屈辱ということ、それからもうひとつは日本が自ら再生を図るための輝かしい『道しるべ』という理想の両面を突きあわさねばならなかった」(K.S)という発言がありましたが、このことも大切に考えていくべきことのように思いました。

初回の話し合いはこのように実に充実したものでしたが、完全に結論を得るようなものではありません。むのたけじさんの文章が参加者の言葉にもあるように何度も何度も読み直さないと、どういうことなのかわからないという発言もありました。たぶん、むのたけじは経験時の思いをそのまま表しているからだと思いますが、どう生かしていくかは今生きている人が作り出せば良いと考えます。そのために読み返せるように、会話を全て文字起こしして、次の回の手元資料に載せるということをしました。
７回目以降の会ではこうしたことも反映させて、さらに内容を深めていくようにしたいですね。
(第２回から６回までは後編)

資料❹　論争「自衛隊を改組し軍縮と防災の実現を図るべき」(週刊金曜日)

「むのたけじ反戦塾」の参加者の土田誠さんから、今回(第7回)自衛隊問題について話し合うと言うことで、討論資料を戴きました。
いただいた資料の順番は下記１．～５．の通りですが、紙面の都合で5番目の「論争」を右に掲載させていただきました。
（「手元資料」編集係）

「自衛隊問題」がテーマになるようですが、考えていたことがありますので、事前に文書で提出させていただきます。ご参考になれば幸いです。

世界地図で見ればごく狭い東アジアで、日本が主導して「軍備拡大競争」が繰り広げられているように思われます。
グローバルファイターパワー（GFP2024)のデータを使用して、軍事力比較、軍拡の情況、自衛隊の現在の問題などを提示したいと思います。
（GFPはアメリカの民間研究機関で、毎年世界の軍事力の分析とランキングを発表しています。と特徴は核兵器を除いて軍事力分析を行い、国民の教育水準や、社会インフラなどのファクターも取り入れてデータ化していることです。）

資料
1．軍事力比較、軍拡の情況、自衛隊の現在の問題（グローバルファイターパワーのデータによる）
2．内閣府「自衛隊･防衛問題世論調査」部分コピー、2023年3月発表
3．朝日新聞･東京大学共同「防衛力強化世論調査」2023年5月3日
4．日刊ゲンダイに掲載された軍事評論家の連載コラム　2023年9月12日①②「自衛隊の無駄の見直し」
5．週刊金曜日に掲載された投稿
2020年1月24日号「自衛隊の軍縮」
＊能登大震災で自衛隊の災害出動が報道されていますので、参考になればと思います。

論争

自衛隊を改組し軍縮と防災の実現を図るべき

土田 誠（つちだ　まこと・66歳、アルバイト）

北東アジアの危機を煽り、さらなる対米従属と軍事力強化を推進する安倍政権の下で「自衛隊」の野放図な軍備拡大が止まらない。

「自衛隊」は、朝鮮戦争の際に米国の再軍備指示により押し付けられた〝米軍基地を守るための治安部隊〟だ。今では〝国防〟の虚飾のもとに、世界6位の軍事力（グローバルファイヤーパワー・2019年軍事力ランキング）を持つまでに至った。また5方面部隊を陸上総隊として一元化したため、将来的に〝クーデター〟を起こす可能性が高い。その上に明確に憲法違反である「集団的自衛権」を行使できるように改悪された。このままでは米軍の世界戦略の下で、海外での米軍の戦争に利用される危険が指摘されている。（〝指揮権密約〟は現在でも存在すると見なされている）

世界の軍事力を比べると、同じ島国で侵略されにくい特徴の英国は世界8位であり、第2次世界大戦の敗戦国であるドイツは世界10位である。第2次世界大戦の敗戦国・日本は平和憲法の理念にのっとり、次の理由で今こそ「自衛隊」の軍縮を実現すべきだ。

①世界最強の米軍基地が駐留する日本に対して、他国（仮想敵国）が急迫・不正の侵略行動を起こす可能性は非常に低いと考えられる。（その上に、海岸線が長い島国は攻略が難しく、英国は第2次世界大戦でナチスドイツの侵略を防いだ）

②有権者は「自衛隊」を、米国の戦争に加担する軍事力ではなく、災害援助に寄与する平和部隊として評価している。

③世界的な気候変動の危機の下で、今後は日本国内での大規模・広域水害が頻出する可能性が高い。

④関東直下型地震や南海トラフ地震などの大規模震災は、今後の30年間で70％以上の確率で発生すると予測されている。「広域防災は待ったなし」の状況である。

以上の理由から、「自衛隊」を組織改編し、軍縮と防災（真の国土強靱化）の実現を図るべきだ。「防衛省」を廃止して「国土保衛省」（仮称）に組織改編し、次の部隊を新設する。緊急災害救助隊（国内部隊、国際部隊）、継続災害援助隊（国内部隊）、国土保全隊（地方自治体と協議し、防災を目的に日常的な治山治水に従事する）、国境警備隊（陸域、海域、空域の国境警備に従事し準軍事力として機能する）。

島嶼などでの国境紛争は起こりうるので、ミサイル防衛も含めてこれに対処する。これらの組織改編は「日米安保条約」が継続していることが前提だが、不平等な「地位協定」の改正作業を進め、近い将来「日米安保条約」を破棄した上で「日米平和条約、不戦条約」の新設に結びつけ、その際に「防衛問題」の国民的な議論の下で、新たな「防衛の仕組み」（北東アジア集団安全保障の枠組み）を検討していくべきだ。

61

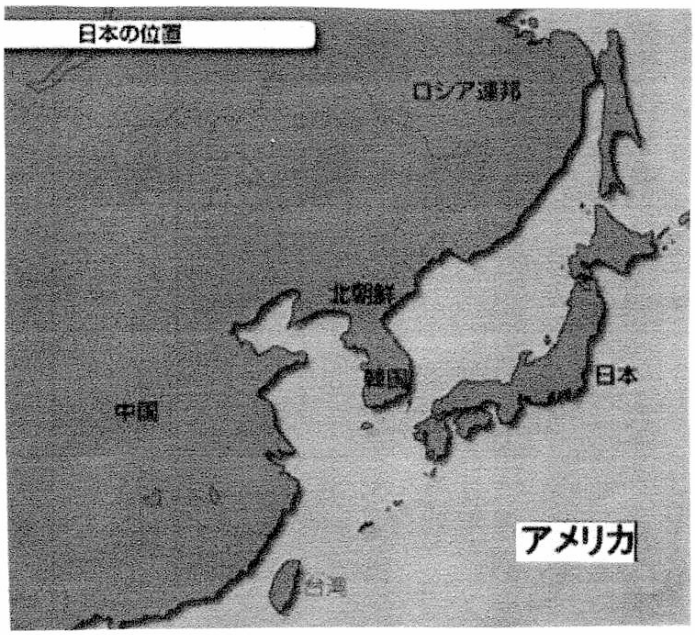
資料❺　自衛隊の原状と問題点、及び市民運動の課題（グローバルファイアーパワー）

自衛隊の現状と問題点、及び市民運動の課題　　2024年3月

○東アジアの軍事状況（グローバルファイアーパワー GFP2024軍事力比較）

ロシア	軍事力世界2位　GFP
	軍事費　1090億ドル
	核弾頭　5890
中国	軍事力世界3位
	軍事費　2270億ドル
	核弾頭　410
朝鮮	軍事力世界36位
	核弾頭　40

韓国	軍事力世界5位
	軍事費　447億ドル
日本	軍事力世界7位
	軍事費　530億ドル
アメリカ	軍事力世界1位
	軍事費　8317億ドル
	核弾頭　5244



○日本は世界有数の軍事大国となった（2013年GFP17位→2022年5位）
　→今後5年で43兆円の防衛費を予算化して、軍事費支出世界3～4位となる
　→安保条約による「米軍基地の駐留」「核の傘」など、過剰防衛の状況である

○解釈改憲による自衛隊の合法化、憲法違反の「集団的自衛権」を法制化
　個別的自衛権の定義・・・急迫不正の侵略に際し、他に手段が無い場合に、
　　必要最小限度の実力を行使できる　→　専守防衛

○「専守防衛」をやめて、攻撃力（敵地攻撃能力）を保持した「抑止力強化」へ
　→攻撃的武器、装備・・・巡航ミサイル・トマホーク400発購入（射程1600Km）
　　・・・12式ミサイルの長射程化（～2000km）、極高速化
　　・・・護衛艦「いずも」「かが」を攻撃空母へ改修、など

○全国の自衛隊施設を拡大・強化・・・国際人道法の「軍民分離原則」に違反
　→自衛隊施設拒否の市民運動・・・石垣市、うるま市、大分県敷戸、ほか

○自衛隊は過去の侵略戦争の反省を忘れた「危険な軍事力」となっている
　→海上自衛隊の旗として、大日本帝国の軍旗（旭日旗）を使用している
　　靖国神社に制服で集団参拝、沖縄で牛島中将の慰霊碑に集団参拝など

○日米軍事一体化がほぼ完成（指揮権密約−自衛隊は戦時は米軍の指揮下に）
　→「中国封じ込め」戦略の下に米日韓の軍事一体化へ→東アジアの緊張激化

今後の課題・・・「自衛隊の軍縮」を目指す市民運動が求められているのでは？
　　「専守防衛」「対話と外交」の安全保障戦略への転換を実現し、さらには
　　「日米安保見直し」「地位協定改正」「米軍基地削減」への政策転換を

資料❻　自衛隊に対する印象について　（内閣府調査）

2　自衛隊に対する印象について

（１）自衛隊に対する印象

問４．あなたは、自衛隊に対してどのような印象を持っていますか。（○は1つ）

	令和４年11月
良い印象を持っている（小計）	90.8%
・良い印象を持っている	32.3%
・どちらかといえば良い印象を持っている	58.5%
悪い印象を持っている（小計）	5.0%
・どちらかといえば悪い印象を持っている	4.4%
・悪い印象を持っている	0.6%

（ア）自衛隊に関心がある理由

（問１で「非常に関心がある」、「ある程度関心がある」と答えた者に）
問２．自衛隊に関心がある理由は何ですか。（○は１つ）

	令和４年11月
・日本の平和と独立を守っている組織だから	28.9%
・国際社会の平和と安全のために活動しているから	10.3%
・大規模災害など各種事態への対応などで国民生活に密接なかかわりを持っているから	53.1%
・マスコミなどで話題になることが多いから	1.6%
・国民の税金を使っているから	3.8%

4　自衛隊の役割と活動について

（１）自衛隊に期待する役割

問６．あなたは、自衛隊にどのような役割を期待しますか。（○はいくつでも）

（上位４項目）

	令和４年11月
・災害の時の救援活動や緊急の患者輸送などの災害派遣	88.3%
・周辺海空域における安全確保、島々に対する攻撃への対応など国の安全の確保	78.3%
・住民の避難など、日本が武力攻撃を受けた時の国民の保護	77.7%
・弾道ミサイル攻撃への対応	55.7%

【資料１】

わが国周辺における主な兵力の状況（概数）

国と地域		陸上兵力（人数）	海上兵力（艦艇トン数）	航空兵力（作戦機数）
日本		１４万人	５１万ｔ	３６０機
韓国		４２万人 海兵隊　２．９万人	２８万ｔ	６６０機
北朝鮮		１１０万人	１１万ｔ	５５０機
中国		９７万人 海兵隊　４万人	２２４万ｔ	３，０３０機
台湾		９．４万人 海兵隊　１万人	２０．５万ｔ	５２０機
極東ロシア		８万人	６１万ｔ	３２０機
米国	在日米軍	２万人		１５０機
	米第７艦隊		４０万ｔ	５０機
	在韓米軍	２万人		８０機

（注）１　資料は、米国防省公表資料、「ミリタリーバランス（2022）」、「SIPRI Yearbook 2021」などによる。
２　日本については2021年度末における各自衛隊の実勢力を示し、作戦機数は空自の作戦機（輸送機を除く）及び海自の作戦機（固定翼機のみ）の合計である。
３　在日・在韓駐留米軍の陸上兵力は、陸軍および海兵隊の総数を示す

資料❼　防衛力の強化「賛成派」6割超で高止まり　(朝日新聞記事)

防衛力の強化「賛成派」6割超で高止まり　朝日東大調査

有料記事　朝日東大共同調査　有権者調査

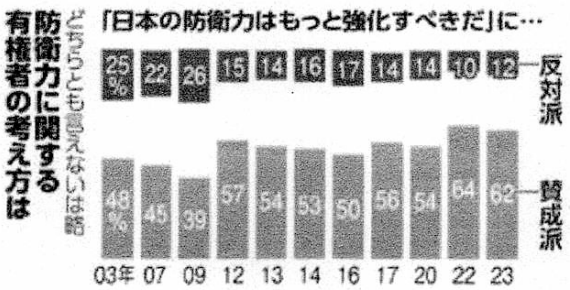
笹川翔平　2023年5月3日 19時00分

B!

list　0

コメントプラス

鈴木一人さんのコメント



防衛力に関する有権者の考え方は

朝日新聞社と 東京大学 の谷口将紀研究室が2～4月に実施した共同調査で、「日本の防衛力はもっと強化すべきだ」と考えている有権者が、 ウクライナ 侵攻の始まった2022年に行った調査と同じく6割超だったことが明らかになった。侵攻の長期化に加えて、 台湾有事 を脅威に感じる有権者が増えていることが背景にありそうだ。

調査は無作為で選んだ全国の有権者3千人が対象で2月28日に調査票を発送した。4月11日までに届いた有効回答は1967人（回収率66%）。この記事では、各質問で未回答者を含めず集計した。

調査では防衛力強化への賛否を5択で質問した。「賛成」「どちらかと言えば賛成」を合わせた賛成派62%が、「反対」「どちらかと言えば反対」を合わせた反対派12%を上回った。

03年の調査開始以来、賛成派は前回22年調査で初めて6割を超えた。ウクライナ侵攻から1年以上が経った今回の調査でも、賛成派が高止まりしている。

[PR]

資料❸　防衛余談概算要求7兆円　これだけの無駄（日刊ゲンダイ）

▷乗中連載(2)▷

これだけの無駄 防衛予算概算要求7兆円

元3等海佐・軍事研究家 文谷数重

政治力で潰される 陸自不要予算の見直し

7兆7000億円にまで膨れ上がった防衛省の米年度予算の概算要求。無駄な予算が相当、含まれている。最大の無駄は何だろうか。陸上自衛隊である。その規模、予算、人員は防衛省最大の無駄である。

本来なら陸自は縮小すべき戦力である。中国や北朝鮮との戦争では、ほぼ出番はない。海外派遣でもあまり使い道はない。それでいて陸海空の中で最大の予算を費消している。来会計だが、恐らく約2兆8000億円を要求しているはずである。

もし削減すれば各種の問題が解決する。まず防衛予算に余裕が生まれる。それにより対中国で必須の海空戦力の強化が可能となる。陸自を半分にすれば、海空自衛隊は4割も増強できるのである。

隊員不足も緩和する。陸自の予算定員を2万人、実人数で8000人ほど減らせば、自衛隊全体の人手不足も解消する。

結果的に陸自自身の近代化も進むだろう。兵器不足や旧式化を訴えている。人員を半分にすれば兵器も半分で済む。しかも、少ない数なので全て最新式に更新できる。

いずれも当然の話である。説明すれば中学生でも理解できるだろう。

しかし、陸自削減は実現しない。防衛省も政府も与党実務家も、本当はその必要性を熟知している。なのに陸自の規模も予算も、そのままである。

それはなぜか。組織防衛の成果である。陸自は、この40年間、日本防衛よりも陸自防衛に力を注いできている。

陸自縮小論は最近の話ではない。その主張は50年も前の1977年ごろから始まっている。

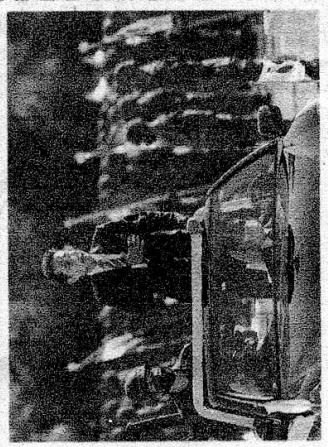
80年代には政府、与党さらには防衛族でも共通認識となった。たとえば86年には、自民党の櫻井政調会長、金丸幹事長も陸自削減を主張した。

この動きに陸自は危機感を抱いた。削減は人員、予算、ポストほかの利権縮小を意味している。そして阻止のために政治力の獲得を進めた。組織内候補の国会送り込みと、その為の事業上の組織づくりの選挙である。活動も強引であり、なかには同令部で選挙資金を配り有罪となった例もある。

この組織防衛が功を奏し、陸自削減は実現しないまま今に至っている。政権や防衛省が削減を進めても頓挫してしまう。防衛族として政界に送り込んだ陸自出身議員が、拒否権を発動するからだろう。また駐屯地誘致区で隊員と家族が票田として作用した結果でもあるのだろう。

陸自を削減すれば防衛費増額は不要となる。それにもかかわらず陸自組織は現状維持であり陸自予算はもしろ増えている。これは陸自の政治力が生む不自然な現状維持であり、不自然な予算増なのである。

（つづく）



無駄 防衛予算概算要求7兆円

元3等海佐・軍事研究家 文谷数重 ①

多大な「陸自予算」と「国産」を見直せば 5兆円で足りる

防衛省の米年度予算の概算要求額が、過去最大の7兆7000億円にまで膨れ上がっている。この金額は適切な規模なのだろうか。従来、防衛費は5兆円前後であった。実に2倍に近い要求額である。しかし、それに妥当性はない。

まず、増額理由として挙げる中国脅威は現実的ではないからだ。海戦期ソ連と比べると日中対立は平穏そのものである。

優先順位も誤っている。貧困が進み、こどもの貧困が出現している。平時に防衛費を増額する理由はないだろう。今は大砲よりもバターである。

なによりも陸上自衛隊向けの支出増額には無駄がある。

本来なら陸自は削減の対象である。陸上戦力は対中軍事力としては、ほとんど役には立たないからだ。また主力となる海空戦力強化の原資をつくるためにも削減が必要だ。だが、実際は逆の増額だ。来会計だが今年は2兆8000億円がそれ以上だろう。なお、金額を公表していた頃の陸自予算は1兆8000億円である。

しかも、防衛省は姑息にも陸自増額を隠そうとしている。いままで「防衛白書」では陸海空別の予算額を示していた。それが2022年度版以降、掲載していないのだ。なぜか。批判を避けるためだ。防衛費増額の中で冗費である陸自支出は削っていない。増額とわかると都合が悪いのだろう。

もうひとつは「兵器国産」の無駄である。

国産兵器には難がある。高価格、低性能、信頼性薄弱の三重苦である。それに当の自衛隊員も淡泊である。

だが、防衛省はその国産兵器に大金を投じている。概算要求では国産戦闘機と各種の国産ミサイル開発に4400億円、また国産ミサイル購入に3000億円を要求している。合わせて7400億円である。

防衛産業には特権である。防衛費増額の中で冗費である陸自支出は削っていない。増額とわかると都合が悪いのだろう。

もうひとつは「兵器国産」の無駄である。

国産兵器には難がある。高価格、低性能、信頼性薄弱の三重苦である。それに当の自衛隊員も淡泊である。

だが、防衛省はその国産兵器に大金を投じている。概算要求では国産戦闘機と各種の国産ミサイル開発に4400億円、また国産ミサイル購入に3000億円を要求している。合わせて7400億円である。

防衛産業には特権である。

ただ、それは防衛の充実にはつながらない。防衛産業にとっての利益でしかなく国や国民には害悪である。

この「陸自」と「国産」の無駄を省けば防衛費増額は不要となる。陸自予算を従来の半分、1兆円とすれば1兆8000億円が浮く。国産兵器の開発をやめれば4400億円が不要となる。ミサイルも海外製購入なら半額の1500億円程度で済むだろう。締めて2兆4000億円の節減である。防衛費は従来の5兆円に収まるのである。

（つづく）

それに将来にわたり支出できる額でもない。アベノミクスの失敗に長期防衛費は今後10年を経すべき局面である。8兆円近いの人口減少と経済は衰退して支出困難となるのではないか。

内容も浪費ばかり

2024.2.22 朝日

自衛隊靖国参拝 戦前からの旧軍意識

上越教育大准教授
塚田穂高さん

陸上自衛隊や海上自衛隊の幹部が部下と一緒に靖国神社（東京・九段）に集団で参拝している実態が次々と明らかになった。自衛隊は「自由意思による私的参拝」とし、「部隊参拝」ではないと主張している。戦後憲法のもとで旧日本軍とは制度的に断絶したはずの自衛隊と靖国神社の密接な関係をめぐり、上越教育大の塚田穂高准教授（宗教社会学）に問題点を聞いた。

――今年1月には陸上幕僚副長ら22人、昨年5月には海自練習艦隊司令官ら「多くの人間」（海幕）が靖国神社に集団参拝した。

軍人や軍属の戦死者らをまつる靖国神社は戦前、国の管轄下にあったが、今は民間の宗教法人であることは争いようがない。陸幕副長らは休暇を取ったとはいえ、事前に「実施計画」を作り、参加者を募った。参拝という宗教行為を陸自として組織的に行ったように見える。個人の信教の自由は誰にでもあるが、国や公的機関が特定の宗教法人と特別な関わり方を持つことは慎まなければならない。

海自は制服姿で集団参拝をしている。公人としての性格が増すので、公私混同と言える。靖国神社の社報には、明らかに組織的に参拝した様子が載っている。もし違うのであれば、本来海自は靖国神社に抗議しなければならない話だ。

――自衛隊側は次官通達の禁じる「部隊参拝」ではなく、「自由意思に基づく私的参拝」だと主張する。

ごまかし、詭弁ではないか。事前に組織的に参加者を募ったのだから、部隊として参拝の手はずを整えたとしか言いようがない。組織の中では上下関係もある。行かなければ「特殊な考え方を持っているのでは」と勘ぐられるかもしれない。「参加は自由でも参拝するのが普通だ」という同調圧力が働きかねない。

――隊員が靖国神社に集団参拝している背景をどう考えるか。

靖国神社は戦後、連合国軍総司令部（GHQ）の占領政策の結果、民間の一宗教法人としてしか生き残ることができなかった。だが、先の大戦の多くの戦没者がまつられている特殊さは続いている。民間の宗教法人が多くの戦没者をまつるねじれた状態が起こってしまった。その掛け違いが未解決なまま続いている。

一方、自衛隊には戦前と連続性を持った「旧軍意識」があるのではないか。自衛隊は少なくとも制度的には旧軍と断絶されている。しかし、自分たちのルーツは旧軍だと見なし、その戦没者がまつられている靖国神社に参拝するのは当然なんだというメンタリティーがあると言える。

靖国神社は、戦前と戦後、旧軍と自衛隊を精神的につなげるシンボリックな存在と言えるのではないか。戦後、政教分離が憲法に盛り込まれたにもかかわらず、「靖国神社は特別だ」という開き直りもあるように見える。こうした意識が靖国神社をめぐって度々噴出していると言える。

政教分離は信教の自由を保障するための重要な憲法の原則だ。公的機関の自衛隊が靖国神社と特別な関わり方をすれば、この原則に抵触する。組織的な関わりを疑われるような行動自体を慎むべきだ。

（聞き手・里見稔）

資料⑩　第6回むのたけじ反戦塾（2023年1月20日）の記録　（１）

※「むのたけじ反戦塾の記録」は、毎回、参加者のみなさんの話されたことを書き起こして､次の回の手元資料に掲載させていただいております。ひとりひとりが、今考えていること、問題だと思っていること、あるいは**「戦争はいらぬ、戦争をやらぬ世へ」**という反戦への思いを出し合うことが最も大切だと考えているからです。
　また、みなさんのお話したことを書き起こし、記録とすることを通して、この「反戦塾」に直接参加していない人にも、みなさんが考えていることを伝えていくことが出来ると考えてます。
　しかしながら、録音したものから書き起こしているのですが、採録者の知識と教養の無さから、よく聞き取れなかったり、わからなかったりしたところがあります。採録しながらもこれは間違いではないか、と思いながら文字に起こしているところ（（？）や（＊＊＊）で表示）があります。
　ご自分の発言と思われるところで，間違いがありましたら、お知らせ下さい。修正して正しい記録としていきます。

●司会
　話し合いを進めさせていただきます。映画を上映する前に武野さんに、このビデオのことについて話してもらうつもりでいたんですけど、私が慌てて忘れてしまいました。むのたけじさんのこの時の事情などを含めてお話いただければと思います。

●武野：
　私は､父むのたけじが95歳位から講演とか、一緒に出かけるようになりました。だいたい5年間位で。その公演回数はだいたい60回位です。 その中で私自身がとてもお薦めする、熱を入れて一所懸命話している講演が３つあります。
　きょうの秋田県の明徳館高校というところで話したものもその一つです。もうひとつは前にあった憲法集会の時の有明記念公園でのもので、短い10分位の話だったんですけど。もうひとつは私がこころにお勧めするのは、東本願寺での講演です。
　うちの父むのたけじは宗教嫌いで、そういうところでの講演は珍しいのです。本人は絶対行きたくないっていってたんだけれども、今日も話に出てきたように学校に行くときは、東本願寺系統のお寺のお坊さんのおかげで進学できたってことがあるもんですから、これは絶対にお礼参りに行かなくてはならないって、無理やり連れていったのです。きょうは、そういう3つのうちの1つを見ていただいたという形になります。
　なぜこのビデオが良いかって言いますと、ふつう動植物は生殖が終わればほとんどすぐ死んじゃうんですが、人間だけが老後っていうようなものがあるわけです。人間以外の動物は子どもを産めなくなればすぐ死んじゃうんです。それが人間だけがその後も長く生きていくのはなぜかということを考えておりました。父むのたけじはそれに対して何を言っていたかと言いますと、お孫さんに自分たちの生き様、生活の知恵を教えるためのものだという考え方をずっと持っていました。そのために晩年は非常に熱心に、大学生とか、あるいは今日のように、高校生に伝えていました。
↗
　私が関与してない時でも、地元の中学校や高等学校で、ゆとり教育の一環で行われる授業の中でも教えることもやってたみたいです。
　大学では秋田大学とか、立教とか早稲田とか、結構いろいろな大学に行って、話しました。 一番最後がなぜか､早稲田でした。そしたら、慶応でも三田祭でやってくれって盛んに熱心に言ってきたんですが、その時は倒れちゃって病院に入院しているときだから無理だって断ったんです。要するに非常に熱心にやっている学校とかもありました。けれども、私がなぜ明徳館高校での講演会を選んだかです。要するにエリートの集まりでじゃないんです。大学とかの講演会では、ほぼすべてエリートです。反戦とかそういう思想に対して目覚めた人たちが集まります。もちろんそう言うところでは反戦とかそういう話があります。
　一度だけ、大学生で「私は天皇制を支持します｡それについてどう思いますか」って質問した人がいました。父むのたけじは、なぜそう思うのかとか質問攻めにした後に、戦時中に天皇制という制度の元に起きた不合理な出来事を話していたような気がします。そうした出来事もありますが、反戦で、天皇制には反対の思想を持っている人たちが多かったので、父むのたけじはこの反戦塾で話題になることを話します。しかし、この明徳館高校というのは秋田市にあるいくつかの定時制高校が一つに集まった高校で、エリートが集まるようなところではないのです。
　昔は働きながら学ぶというのが定時制高校であったんだけど、今はどちらかと言えば、学校に付いて行けなくなった人で再挑戦する人が多くなっています。しかも、昼でも授業を受けられるようになっているので、いわば単位制高校というようなものであるらしいらしいのです。
　このたびの依頼は、そういう挫折を越えて卒業する生徒に､父兄として日本一の卒業式を贈りたいので、著名な人に講演してもらいということでした。そういうような希望を持って、私の方に連絡がありましたので、これは是非行かないといけないということですね。しかも向こうの担当者さんから10分位しか真面目に緊張してられない生徒だから途中で騒ぐかもしれないような話をいただいていたんですけど、実際は90分間の間､ピクリともしないで、しかも面白がって聞いていました。テレビ局カメラが、3台位廻っていたんですが、 それもあったかもしれないけど、本当によく聞いてくれていました。話の内容､あまり聞いたことの無いような話だったと思います。要するに学生さんたちに自信を付けさせるような内容の話だったと思います。そういうようなことがあったので､私は皆さんがおすすめしたい映画だったということです｡以上です。
（8：11）

●司会：
　皆さんからこの映像を見てどう思われたかっていうことを、それと日頃を考えていることとか、これからどういう風にしていくかお聞きしようと思います。その前に今の映像を見て、もし感じられたこと、考えられたことがありましたら、 先に順番で言わなくて、お聞きできればと思います。
＊この後、話し合いの記録を録って書き起こしし、きょう参加していない人とも共有したいしたいという説明
＊その記録を作りながら､どういう話がこれまで出たかを考えて見たこと
……だんだんこう話していることが具体的になってきてですね。大きく分けますと、まず⑴今の危機っていうのをどういう風に捉えるかっていうこと。沖縄でミサイルが配備されて、台湾危機が叫ばれて、いろんなアラートとか言って、ミサイルが飛んでくるぞっていうようなこの、煽りって言いますか、そういったことが繰り返されて、世界的にもいろんなところで戦争が起きて、実際に誰も止められないっていうな状況、そういったことに対してどうすればいいかっていうのがまずひとつあるかと思うんです。
（次ページへ続く）

資料⑩　第5回むのたけじ反戦塾（2024年1月20日）の記録　（２）

⑵それから過去の戦争って言っては変ですけど、とくに近隣とのですね、中国であったり､朝鮮であったり、韓国であったり、そうした近隣との戦争、15年戦争っていう言い方ありますけれども、その戦争は一体どういう風に、どういうところから始まったんかっていう話題を、問題として出してくる方が、わりと多数いらっしゃいました。

⑶その中ではやはり日本自体のその加害責任って言いますか、戦争の加害っていう問題がきちんと歴史を学んで、歴史からあるいはそれをこう、伝えていく、あるいは教育の中に入れていくとか、そういったことをしなくてはいけないんじゃないか、だから日本が過去の戦争の、あるいは戦後のこともそうなのかもしれないけれども、それを語らないで そのままにしていることが今のような状況の問題になっているんじゃないかっていう話をわりとされてる方が多かったと思います。

⑷それからやっぱり戦争になったらどうなるのかっていうところでいわゆる言論の弾圧であるとか、その中でのジャーナリストの役割ってあるとかそういったことを問題にしてですね、今のメディア、メディアが実際のきちんと伝えていない、そういったこともあるっていうことを問題にしてですね、やっぱりむのたけじさんの話ってのは、ジャーナリスト、ジャーナリズムに関するものが多いですから、そういったことをやはりビデオとか見て、一番感じたとかですね、常々非常に危機感って言いますか、そういったものが強まっている今の政治っていう風なことで問題にして、じゃあどうすればいいのかって話をした時に、やっぱり「声を上げる」ことだとかですね、身近な人から話をしていかなきゃいけないんじゃないかとか、そういう具体的なそれぞれのお考えが聞けてきたかなと思います。

順を追って、次回までにちょうど6回分ですので、まとめて今までの皆さんの問題意識っていうのをまとめて、また次の話の中で皆さんと一緒に、こう深めていきたい、共有していきたいと思います。それに加えて、話を広げていくっていうのはどういう風にしたらいいか、今日の映画は、高校生を相手にしてむのさんがああいう話を語られたって言うところなんですけれども、いろんな試行錯誤って言いますか、例えば自分たちがやってるってことではなくても、こういうことをやっているのを聞いたとかですね、こういうやり方もあるんじゃないかとかそういった話でもいいですので、先ほどあげた3つぐらいの「取り組み」って言いますか、私たちの問題意識っていうのに加えて、ちょっと今日はお話が聞けたらなと思っております。　（16：40）

●K.S.：

目黒から来ました。いま2時間ほど見せてもらったんですけど、私、むのたけじさんずっと元気だったと思ったんですけど、胃がん、肺がんとか重病をされて、それでもまあ99歳で、あれだけ大きな声で喋れたというのはやっぱりすごいなと思いました。

私は、いろいろ見てみたいっていうか、それでですね、別に投票権あるわけじゃないんですけど、ちょうど1週間前、台湾で総統選挙があったんで、行ってきました。 ものすごい熱気ですね。ちょうど開票速報はもう4時に投票が終わるんで、今頃からちょうど（開票が）始まったんですけど、台湾独立連盟でいうところで台湾人と一緒にいました。新聞でよく言われてますが、今度は蔡さんの後を頼さんが継いで、民進党ができたっていう。独立連盟が今から65年ぐらい前、東京にできてですね、それを世界的な組織に発展させた。それで台湾国内でももう自由にものが言えて、それまであの国民党の1党独裁で、もう中共以上にひどい弾圧があって、台湾人はそのために何人も殺されて、民主進歩党というという台湾人の政党ができます。その結果は日曜版「赤旗」にも多少は書いています。分かりやすく書いているのは、「一つの中国の原則を認めない」ということですね。民進党は「台湾は台湾人の国を作る」と言うことですけど、それはアメリカが現状維持だといいます。中共も現状維持だったら、いいことなんですけど。今、日本は台湾を50年間植民地統治しておきながらですね、今、何もしてないというか、まあ国交は無くなったということですね。集会に昭和9年生まれの婦人もおばあさんも来て「ふるさと」の歌を歌ってくれましたね。まあ日本からというのは、台湾人で日本教育を受けた人は、外見は台湾人でも心の中は日本人だという人が私も20人ほど知ってたけど、みんな亡くなった。

日本教育を受けたからもう 97歳ですから何百人か、かなり少ないと思います。まあ、それで私じゃじゃ馬なんか、とくに「見てやろう」言うことですね。

ちょうど11月には、カイロに行く機会があったんで、じゃあアラブ連盟に21か国参加してるんですけど、今度のガザのにもほとんど機能してない。自分らの国のあれを言うことでホテルで交渉したんですよ､アラブ連盟の本部がカイロにあるんで、そこと、アメリカ大使館とイギリス大使館とイスラエル大使館に行きたいって。135ドル言われたんですけど、どんなのか見てみたいんですね。駐停車禁止で撮影禁止、それでもいいか言われた。で、このアラブ連盟の本部に行ったけど、国旗が21あるんか思ったら、緑の小さいのが1つあっただけで、もう全然その宣伝してないんか、あの機能は無いような感じでした。アメリカ、イギリス、イスラエル大使館は、(日本の)最高裁判所見たことありますか、もっと酷いんで、 ドーム型になって、窓が1つもないんですね。その3カ国、国旗もないのか、何かわからないか、そんな状態なんですね。

それで今度、何でガザが（あのように）なったかというのは、カタール、それからアラブ首長国連邦がイスラエルと国交（回復）をやって、サウジアラビアまでも国交の話を進めてたんです。それで、我々ガザのことを忘れられたらいかんというので壁を突破して200人以上の人質とって、ちょうど土曜日、10月7日の土曜日はユダヤ人の休息の日なんですよ。その一番手を抜いたところに、油断してたということで、ああいうことになったんですね。

まあ 長くなりますけど それで日本は台湾と国交がないんで、交流協会へ行ってみたんですよ。台湾有事にいうことで。そしたら3ヶ月以上滞在する場合は 在留届け出してくれ言われたんですけど､いつ何が起こるかわからないですから、すぐにでも出してくださいと言われましたね、私もそんな長くいることないんですけど。

フィンランドの日本大使館は、こんなものか。あのビルの5階だから、こんながあったと思うんですけど。フィンランドもNATOに加盟したんです。去年の4月に。それで私8月に行った時に、フィンランド大使館で聞いてみたんですよ。「NATOに入ったと言うことはいつロシアと戦争なくてもおかしくないんじゃないですか」と。 そしたら2600人の日本人がいるけど、私たちはもう退避方法は考えていますて。

ま、旅行してたらですね､単なる私、観光じゃなくて、裏に何があるか言うか、ま、大使館巡りも面白いなと思っています。安く上手に行ける方法はいくらでもあるんでですね､そんなお金かかる言うことなくて。　（24：40）

●F.K.：

八王子から来ました。私は1933年生まれで今年の3月で92歳になるけど､いやあ、やっぱり体力落ちてますね。だから私は、子どもの目ではあるけど、1945年8月15日以前の日本、でたらめな日本を見ているんですよ。今は、中帰連の、ま、歳だから､役になるのは勘弁してもらっているんですけどね。 今、中帰連の組織に入っています。

で、さっき若い人にどう伝えるかというテーマが、お話がありますよね。これ、やっぱりほんと難しい。私は1回だけ、世田谷の高校に呼ばれて中帰連の話をしてくれと言うんでね、夏期講座でね、夏の暑い日、行って、日本だけじゃなくてね､第一次世界大戦の全体の流れを端折って話して、その後中帰連の話をしました。中帰連の会員は、皆さん、みな鬼籍に入っちゃってますからね、その人たちの遺した言葉の DVD があるんですよ。戦犯たちの告白とある憲兵の謝罪、この二本が両方でね 1時間15分ぐらいで見られるんですよ。 ところが1時間しかもらえなかったから端折っていくら話してもね、DVDは途中までしか見せられなかった。ただ感じることは、今の高校生は何にも教わってない。第二次世界大戦に関しては､何にも教わっていない。これが現実ですね。私が話を終わった後、男の生徒が何か握手にきましたけどね、こっちも感動していた。

資料⑩　第7回むのたけじ反戦塾（2024年1月20日）の記録　（３）

こう言う話を聞いてもらえるって言うのはね。そういう場所がものすごく大事だと思うし、作りたいとおもうけど、なかなかね。公立学校だったらそういうこと受け付けませんからね。そこ私立学校だったから、声がかかって、そういう機会が持てたんだと思うんですよ。 あともうひとつは私がちょっと、第二次世界大戦全体のまとめた本を出してますのでね（註❶）。その関係で八王子の都立大学の学生にグループに呼ばれてそこ行って、そこはしっかり話ができたと思う。そんなことでよく、本当はね、声がかかるればどこにでも飛んでってね、1時間 2時間、話、したいんですよ。でもそういう(機会)が持てない。どうしたらいいかって言うのは、私も解決策もってないですね。

それと今日、ちょっと本を2冊紹介します。私の存じ上げている人で、上丸洋一さんという人で、朝日新聞の元記者です。この方が、「南京事件と新聞報道」(註❷)という本を出しました。まさにむのたけじさんが体験した時代ですよね、何も書けなかった、と。そういうことを丹念にこの方調べてね、その当時の新聞ですね､戦争途中の新聞をよく調べてね、検証したそうですよ。そして最後に「本書は、現在のジャーナリズムそのもののありよう､そのものを問う（？）」その通りだと思うんですよね。

で、もうひとつ紹介したい本があるんですけどね。1950年生まれの女の方で、相可文代さんっていう人が書いて出した本ですかね。「ヒロポンと特攻」（註❸）麻薬のヒロポンですね。私、記事を読んで、ああと思って買ってね、読んだばかりなんですけど、また2回読みなおしています。そのぐらい中身がいいです。
何も特攻とヒロポンだけがメインテーマですから、ヒロポンと特攻のいきさつやら、そういったことが、ずっと出てきますけども、後に出てくるのは､あの時代のね、軍隊の組織とか、それが見事に書き上げられてあるんですよ。ものすごく感動したんでね、題名だけ控えておいてください。「ヒロポンと特攻」発行者は論創社。
（32：00）

註❶「自由への代償：ファシズムが吹き荒れた時代」
倉田冨士雄著・ウインかもがわ;かもがわ出版
註❷「南京事件と新聞報道　記者たちは何を書き何を書かなかったか」上丸洋一著・朝日新聞出版･2023年10月
註❸「ヒロポンと特攻　太平洋戦争の日本軍」相可文代著・論創社・2023年10月

●R.S：

豊島区から来ました。今日は女性ひとりなんですけど。私はこの会は本当にね､希有な男性たち、すごくまじめで、理論的、理性的ですごく私より魅力的な方が大勢いらっしゃる､出てきている、私はそれが目的できているんですけど。最近感じるのは、私はアメリカもあまり好きでないな、ロシアはあまり好きでないな、中国もあまり好きでないな、やっぱり日本は良いよね、でも何かあったら最低の防衛はしなきゃならないけど、絶対この国は手出しをしてはだめだっていうことを、私も85になりましたけど、これは言い続けなくては、非戦て言う9条だけは見続けようって今思っています。まもなく､出るかどうかわかりませんけど、『日本女性の出番』って言う本を書いています。 胎盤は男性の遺伝子DNAからできているってここで言ったら、「感動しました」て書いてあったんで、ええ、こんなことで感動してくださる男性がいるなんて希望だなと思っています。

胎盤は男性の遺伝子できているんです。ということは、生命の始めのところから、本当に哺乳類のそこのところから男性もメスも平等に命を作っていたんだな、1匹の精子だけじゃなくて多くの何万という精子が子宮の中に入って胎盤を作るんですよね、6日目ぐらいに。それがわかって私すごく、「プラネットラブ」のようなのを感じて、今度の『女性の出番』の第１章にそれを持ってきました。私は胎盤は男性の遺伝子でできているってことはすごいことだって、本当にこれは、人という生物が哺乳類からずっと進化というか、出てきてここまで来てるって言うと。それで本来は生物科学的に行くと XX って女性がもとらしいんですけども、その胎盤の中の男性遺伝子、ホルモンのシャワーを浴びて性っていうものは決まるって、前から6週間目で決まるんだよねっていってたんですけど、ああこの胎盤の中の男性のホルモン、生殖ホルモンによって決まるんだと思ったらなおさら愛おしく思っています。
（34：52）

●H.N.:

調布から参りました。自分なりのテーマは決まっているんですけど、自分の頭が整理できないんですね。今日2つだけ話しますね。

今日午前中に行った講演というか､フィードワークがあってですね。去年から関東大震災朝鮮人虐殺100年、今年でいうと101年の現在地、ということで、大杉栄と伊藤藤野枝、そして橘宗一(註❹)の虐殺事件というものすごく濃い話があったんですよ。話してくれた先生が埼玉の中学校の先生なんですけど、パワーがあってですね、まだ全部は入り切れていません。

だけどあらためて考えて、この会は日本人の加害の歴史を一所懸命若い人に伝えたいと言うかな。僕自身が技術系、エンジニア系だったもんで、頭の中は歴史観は高校時代の歴史しか入ってないんですね。その後ちょこちょこは勉強していますけど、自分自身が学んで、学び直してですね、 それを、場面はわかんないんですけど、若い人に伝える観点を自分で養おうと思ってすこし勉強しています。

そのひとつのきっかけが、去年の韓国人虐殺100年をどう考えていくか、いっぱいヒントがあったけれど、自分が整理できてないのであんまり喋りませんけど、時代的には大震災、この先生も曰く、1910年韓国併合から朝鮮併合から始まっているよ、と。そこら辺まではわかってきたんです、だんだん。虐殺事件の時に同時期にあった社会主義者、アナーキスト、大杉栄とか、亀戸事件ですよね、この時代に朝鮮虐殺と社会主義者、アナーキスト虐殺がどうして起こったのかという話でものすごいパワーを持って、今日聞きました。この先生、この観点で、中学生にも少しそういうのをやってきたらしいんですけど、今は卒業して大学の講師ですかね。で、先生のことばを紹介します。

「自分のつたない授業作りが、現場の先生方をも捉えている。理想の実現は教育の力に待つ。1947年教育基本法は、今も現場の先生には、生きている（？）」ということで、僕は知らなかったですけど、教育基本法1947年には、「理想の実現は教育の力に待つ。」という言葉は入っていて、今は改正で消えたみたいですね。それもつながったんで、「えっ」と思ったんですけど、やっぱりこの先生の問題意識、迫力を感じました。余談でもないのですけど、今日午後は大杉栄の虐殺の現場まで フィードワークがあって、こっち(反戦塾)があるんで遠慮したんですけど、社会主義者の集まっている通りがあってですね、新宿に柏木館（？）って言う通りがあるらしいんですよ。それをずっと廻っていくようなフィールドワークがきょうあったんですよ。すみません今日は目いっぱいこの話を聞いたんで紹介します。

もう一点、これも紹介なんですけど、立川の勉強会に行ってましてですね、そこでイスラエル､ガザの問題を紹介されました。 その中にいたメンバーの方にですね、これを紹介されたんです。NHKでやっている3チャンネルでやっている「100分で名著」って言うのを見て、ジーン・シャープの「独裁体制から民主主義へ」(註❺)、非暴力の話をやっているんです。ジーン・シャープって知らなかったんですけど、全部見ていないんで、紹介しかできないんですけど、少しだけ、今、第2回目で見たらばセルビアの解説をしてました。これ紹介だけです。非暴力でどうするの。暴力ではなぜいけないのって言う話とか、具体的に是非と紹介させていただきます。
(さっきの埼玉の先生のお名前は？)　中條克俊さん（註❻）。今は中央大の特任教授らしいですよ。　(40:35)

註❹　橘宗一(たちばなむねかず)：アメリカ移民の父と大杉栄の妹との間に長男として生まれた。橘宗一虐殺1923年、大震災の混乱の中，東京憲兵隊分隊長，甘粕正彦は，大杉と青鞜社に参加した伊藤野枝と，この橘少年を逮捕し，虐殺した。
註❺：「独裁体制から民主主義へ」：ジーン・シャープ著･筑摩書房・2012年8月　世界で数々の賞を受けたドキュメンタリー映画「非暴力革命のすすめ―ジーン・シャープの提言」がＮＨＫ・ＢＳで放映されるや、大きな注目を得た。「100分で名著」ジーン・シャープ「独裁体制から民主主義へ」NHK出版・2023年12月

資料⑩　第6回むのたけじ反戦塾（2024年1月20日）の記録　（４）

註❻：中條克俊（ちゅうじょう・かつとし）：埼玉県公立中学校社会科教員。中学校教員時代から現在に至るまで、地域の掘り起こしに専念している。戦争と平和を研究テーマとして占領時代史の掘り起こし、聞き取り作業を進める中で、日本の片隅にあって「基地の街」と呼ばれた朝霞の占領時代とそれにつづく「戦後」の歴史を若い人たちにも伝えたいと強く願うようになった。
『中学生たちの風船爆弾』（1995年、さきたま出版会）
『君たちに伝えたい、朝霞そこは基地の街だった。』（2006年、梨の木舎）、『君たちに伝えたい②朝霞、キャンプ・ドレイク物語。』（2013年、梨の木舎）、『君たちに伝えたい③朝霞、校内暴力の嵐から生まれたボクらの平和学習。』（2017年、梨の木舎）などがある。

●M.M.:
　川崎から来ました。最初、今、テレビのことを言われたんですが、独裁の時に、同じ時代でも、情報ってどれだけ偏っちゃうかっていう1つの例で、ガンジーってヒトラーにイギリスを何とかして、インドを独立するのに協力してくれって頼んだよね。ヒトラーって、あの時代、ノーベル賞候補にもなってたんですよね。でもなぜ、それが残っているのか、独立への依頼を送ったって言うのは、オックスフォード大学の書庫にあるらしいんですよ。（？）それは、アマルティア・セン（註❼）さんが、みんなが思っているのを単一の決めつけるのは、まずいよって警告した内容があるんで。忘れないうちにいおうと思って。
　今日見させていただいて、人間関係で大事なのは心得として、敬うことだっていうことにひとこと。敬い合う人間関係っていったときに、それだけ捉えるとすごく誤解される可能性ってのもある。敬って自分は従う、上下関係、そういうような捉え方をしちゃうかもしれないけど、お互いを大事にしあうっていう、敬うって言うその言葉を高校生の時点での人たちにどれくらいでわかるかどうかわかんないけど、ある一定生きてきた人だと、そうだよな、愛とか、助け合いとかっていうよりも敬うっていう言葉を使えるっていうのが素晴らしい、それが今日、良かったなと思う。
　高校生が先の戦争の時のこと、ほとんど伝えられてないって言った時に、あの中国や韓国で起こったことはここにいる人だったら、だいたい知っているだろうけど、例えばアメリカで財産没収されて、収容所に送られた、それは知っててても、ブラジルの開拓民も連行されて収容所に入れられたっていうことを。
　それと近いところだったら、例えばベトナムで日本が入っていた時に、フランスが占領した、押さえていたとこもあったじゃないですか。フランスの人たち、ハノイかなんとか、サハ州ってとかっていうところで 800人以上の男女子供たちを皆殺しにしているんですよね。 それって、映画にもなっているし、ヨーロッパでは、それ上映されていて、フランスの人なんかも見てるんですよね。それもひとつだし、インドネシアでオランダの住民の人たちをいわゆる手込めにしたり、慰安婦みたいな扱いか、そういうことをしてたっていうことがあったから、オランダの住民の人たちを連行して隔離して若い女性なんかも、いわゆる家政婦兼おもちゃみたいに、で、その時の経験を持った人がオランダでは本に出してヨーロッパで読まれてるんだよね。
　さらに横の方だったらシンガポールでも華僑の人たち16万5000人殺戮してるじゃないですか 。碑があるじゃないですか。そこで「老後住むのは、インドネシアが良いです。治安がしっかりしてます」って。日本人じゃないならいいけど、日本人だったらそれを安易にそのままとらえて行ったら、現地の人たちは毎年もう80年以上毎年その慰霊祭をしてるっていう。だからなんて言うかこの、高校生の人が、大学生になったりシンガポール行くんだって「ちょっとそこに行けよ」ぐらいなね。
　さらにマレーシアのところでも、あの金の略奪をして加工してて、それ映画にもなって、賞まで取ってもいるんだけど、イメージフォーラムとか、ユーロスペースとか、マニアックなところでしか上映されないから知らないと、知らないって言ってもこの会の次の回でも映画を介していうことだと、そういう関係の映画ってしっかり残っていいじゃないですか。知らないっていうことは言い訳にはなるかもしれないけれど、知ってる人たちに向き合った時にどういう扱いを受けるか？
　これは最近のって言うか、今起こってるイスラエルのガザで、あんなことをしてるっていうことで「イスラエルはひどいね」って、「その前に一言ないのか」って言った時に、あれって日本が満州国でやってたこととほとんど基本的に同じじゃないですか。1936年の時に帝国議会で日本人を500万人満州に住まわせて 我々にとって都合のいい国を作るんだって帝国議会で決めてるんでしょ。広田弘毅内閣で。決議事項なんだよね。と言うことは、今まで住んでた人たちはどうなるのって、それでいわゆる北海道の開拓と同じように、現地のアイヌの人たちを手当たり次第に土地を奪って、「お前らここに住め」っていうことで収容所っていうか、収容施設に移住させて、あっち行け、こっち行けって移動させる間に絶望の中で次々と亡くなったわけですよね。その時を「開拓」って言って、その成功体験が満州国、更に余計なことを言えば、憲兵をやってた人が、もう亡くなっちゃった人なんだけど、軍隊が移動する時に各街々で探し当てた若い女性なんかを夜になったら襲ってって手込めにして、普通だったら埋めて捨てちゃうわけじゃない、殺して埋めて捨てちゃうわけじゃない、でも時には「日本には物を大事にする文化がある。もったいないっていう文化がある。もったいない、まだ使える、慰安婦って言う形で、 ＊＊＊＊っていう選別なわけでしょ。日本人は米って（？）。マレーシアの方まで連れ回してって、アメリカとの戦況が悪くなってた時に、そのまま放置して米軍やイギリス軍が、解放した時、何でこう、こんなところに君たちはいるんだっていう、その調書（？）とか写真とか残ってるわけですよね。それでそれが世界にそういうものに関心する人たちには配布されてるわけですよね。「知る、知らない」とか、モノをだいじにする文化があるからいいねで、済むわけじゃないですよね 。
　で、本当に慰安所が何でこんなにあるんだっていう、それは別な話になっちゃうけど、そのガザでやってることっていうのが、ちょうど満州国で日本がやってた、まだ、あのそういう意味ではイスラエルのやってることの方が慰安婦にしたり、もっと早く効率よくここにいる住民を殺処分するのには、731部隊の人体実験を、9000人位あそこで殺してるわけでしょ。それってこれから次の次の世代の人たちが後に育ってった時に、年を追うために情報って充実してくるから、知らないっていう本当に安易に言えるんだろうかって。思うと同時に、テレビでいろんなコメンテーターが簡単にね、 これって、ひょっとして満州国で我々のおじいさんなんかがやってたことと同じじゃねえの、と言う位のコメントが誰かひとりでもいるかなって思うんだけど。
　あのニュースを見てて、あの起こっていること、結局例えば日本の建国の時からそうなんですよね。建国の時に縄文時代、弥生時代、石器時代、その時に住んでいた住民たちがいるところに、弥生時代の時に半島、大陸から怒涛のように入ってきて、ちょうどアメリカで起こったことと同じ、ヨーロッパの人たちが入ってって、インディアンを皆殺しにして、アメリカの建国されたわけじゃないですか。
　日本も同じことをやっているわけですよね。同じことをやっているっていうのが今、去年ベストセラーになった上野の科学博物館の館長の篠田謙一（註❽）さんが、「あ、なんだ、本州にいる、縄文の頃からにいる人たちの遺伝子が10%の7%ぐらいから9割以上は渡来人じゃないか」って。といったら、結局「大和心」って何よって。だからアメリカでは出身が今だったらわかるから、アメリカ魂なんて間違っても笑い話にしかならないんだけど、日本では大和魂って、どこから来た人たちよっていうのがもし分かったら、だって、ありえないことですよね。（53：09）

註❼：アマルティア・セン：インドの経済学者、哲学者。アジア初のノーベル経済学賞受賞者であり、政治学、倫理学、社会学にも影響を与えている。無神論。アマルティア・センの研究は、飢饉、人間開発理論、厚生経済学、貧困のメカニズム、男女の不平等、および政治的自由主義など
註❽：篠田謙一「新版 日本人になった祖先たち―DNAが解明する多元的構造」NHK出版・2019年／「人類の起源」中公新書2022年

（次ページにつづく）

資料⑩　第6回むのたけじ反戦塾（2024年1月20日）の記録　（５）

●司会：
　私の感想になってしまうんですけど、前回、話を聞いた中で、印象に残ったのは、 韓国、中国では近代史ってことを教えているんだけども、日本は歴史をやってきても、近代史はほとんど教えないっていう話があって、それを聞いたときに、向こうではどういう風に教えられているのか、教科書だけでもいいからちょっと見て見たいなと思って。
　教育って言うのが一番大きいと思うんですけど、ちょっとこれから調べてみようかなって。同じように今お話聞いて、ベトナムの話とか、インドネシアの話とか、それはオランダではちゃんと本が出ていて、オランダの人はみんな知っているみたいなことがあるんだったら、それで映画も作られているんだったら、イメージ・フォーラムとか、あまり大きな所ではないと思うのですけど、ただ、映像があるっていうことは、日本に来てるって言うことですから、それをたどっていくっていうことで。「憲法を考える映画の会」で、 今、映画のリストを作ってんですけれども、きっかけだけでも教えていただければですね、ちょっと探してみよう、それはどこが配給してるんか？と当たっていくと、我々も見れるし、我々も使えるというものが増えてくんじゃないか、それによって「知らないでいました」っていうだけじゃなくてですね、やっぱり「みんなで知らなきゃいけないことなんだよね」っていう話ができるんじゃないかなと思うんですけど。

●K.S.：
　731部隊のことを言っていましたけど、あれ9000人じゃなくて、だいたい3000人が（？）。いま一瀬弁護士が731部隊の関係でまた裁判してます （註❾）。731部隊だけじゃなくて、今でも旧満州、東北地方に行ったら、日本時代の建物が残っているんです。国会議事堂があったり､名古屋城があったり、あれ、中国人が不思議なのは、なんかその、満鉄の本社も全部記念館として残していくのです。残していくのは普通考えられない。ま、証拠はいっぱいあると思いますね。
註❾：731部隊細菌戦国家賠償請求訴訟。一瀬敬一郎弁護士。　日本の中国侵略戦争の被害者への謝罪・賠償実現に取り組んでいます（１９９５年から７３１部隊・細菌戦問題に、２００１年から重慶大爆撃問題に）。 最近２０１８年から中国文化財の返還運動に携わっています。

●M.M.：
　あ、それだとよく見方を変えられちゃう、インドネシア独立に対して、日本の旧軍人が協力してくれ、すごく貢献をしてくれてっていう、感謝されてるんだって、それをことさら取り上げる話題もあるんだけど、戦争が終わってインドネシアにいた日本の軍人たちにとって国に帰るためには、オランダの、もとの占領軍て言うか、もとの関係者に投降しなければいけないですよね。オランダの方に投降するって言う人たちが、オランダの方では、日本に何をされたかってのは知ってたから、手当たり次第に公開処刑されたわけですよ。投降して帰ろうと思っても、あいつもあいつもあいつも公開死刑してだぜって、だめじゃんって。行き場がなくなってしょうがないから、インドネシアの解放軍に加わった人たちがほとんどだぜっていうのが、インドネシアの中で言われていることなんでね。でもそれをインドネシアの解放に日本軍がすごい貢献をしたんだっていう話に変えられちゃってると、日本で語られてるのと、それはそうだろうなって、オランダに投降しなければ日本に船が、船とかがなければね、これはしょうがないよな、ってそれはイメージはできるだろうけど、話って、どういう立ち位置にいる人たちかって、どういう状況だろうかって想像できたら、どっちが正しいんだろうって私は思うんですけどね。
（58：36）

●武野：
　ひとつだけ、インドネシアでオランダの人を侮辱したっての、うちの父も見てますし、オランダ人もまたインドネシアの人を虐殺したっていうそういうのもありますし、まあ、そういうようなので実際見てるっていうそういう話だけちょっと付け加えさせていただきます。 （59：06）

●T.K.：
　墨田から来ています。きょう映画見た時にですね まずまあ自分も高校でやってたもんですから、非常にその人選って言うんですか、今日の講演のように非常に難しいんですけども非常にこの若者の前にしてですね、その若者の一番関心があることか通じているむのたけじさんが大事にしていることとか、思いのたけを、おっしゃっていて、非常にその感銘を深めたんじゃないかなって、聞いている生徒さんたちは…、そう思いました。
　それでまあ自分もよくわかるんですけど、この今、学び直しじゃないですけど そういう高校で難しいと思うんですけども、まあ本当に力強い言葉、それからの体から出る、その今までの体験から出てくるものだとか、そして何しろあの、質問が良かったですよね、質問が非常に、出てこないんですよ。大体そういう質問というのは。その時にやっぱりできればその先生の言葉よりも、生の生徒の声が聞きたいなと思ったのは、本当にむのさんも言っていましたけど、その勇気を持ってね、質問してくれたそれに答えるというようなところで非常に質問が良かったし、先程の、尊敬と敬うってことも含めてですね、非常に良かったし、で今日の主題である、その「絶望すべきことに、しっかりと絶望する」というような、ほんとまさにそれをおっしゃってましたよね、お話の中でも。非常に感銘して聞けたし、自分ならその安倍首相のことを批判してもですね、なんかちょっと違うとこ来てるような感じで､ところが今日のむのさんの話聞いていると、真にそういうことには抵抗できないような意志の強さというか、地に着いたというか、もう本当にそういう方がいらっしゃらない本当にそういう時代になって、ほんとこれから大変だなっていう風に思います。
　私もあの去年、あの関東大震災100年と言うことで、いろんな学習会、講演会も参加してですね、行ったんですか、今日たまたま午前中､会合で話をしてくれっていうんで、ほんと自分は口べたでダメなんですけど、話できてまあ自分も行ったんですけど、ま、そういう講演されている方は長い年月掛けて取り組んでられるわけで、自分なんかにわかなもんですから、まあそんな簡単には話もできないですから､本も読んでないものが多くあるし、これからそれをきっかけにしてですね、また自分で勉強を続けてですね、この反戦塾でも勉強させていただいてですね、いろんな共通項、共有を持てるような方たちと一緒にまた深めていきたいと思っています。
（1：03：30）

●M.T.:
　埼玉から来ました。私だいたい東京にですね、月、6～7回かな、集会とかデモに参加しているんですね。集会とか、デモに参加するときに、自分で手作りのステッカーを作って参加しているんです。今はですね、この1年ほどはですね。「自衛隊は軍縮」というステッカーを持ってます。「専守防衛を徹底しろ」というのですね。この1年間こういったステッカーを持って、その時々のね、沖縄の問題とか、その集会デモのテーマがあるので、それなりのステッカーを持つんですけども、必ず「自衛隊軍縮」というこう言うステッカーを持って歩いています。で、まわりを見回していても、自衛隊に手を突っ込むような、そういうステッカーを持ってる人いないんですね。
　私は、市民運動を見てて、具体的でないなと思っているんです、近ごろは。理想論か、抽象論なんですね。反戦運動が。日本の場合だったら、自衛隊を手を突っ込んで、自衛隊を何とかするっていう風にしないと、この軍拡は止められないですよね。政権交代って言うのは手っ取り早いんでしょうけど。予算を組み替えて、軍事費を減らすっていけば一番良いんですけど、そうではない状態ですと、自衛隊に手を突っ込んで、こんなモンスターみたいな軍隊はいらないんだと、言うことを議論していかないと、市民運動はちょっと弱っているんじゃないかと思っているんです。
　11月の沖縄県民集会で1万人が集まって遺骨収集をしている具志堅さん（註❿）が、「軍隊は住民を守らないんだ」とおっしゃって、そして「自衛隊という軍隊が、沖縄にあると攻撃目標になるんじゃないか。」「住民が巻き添えになるんじゃないか」、「自衛隊は沖縄から出て行ってほしい」っておっしゃたんですよ。で、沖縄の反戦運動で、自衛隊が沖縄から出て行ってくれって言ったのは、たぶん具志堅さんがはじめてじゃないかという気がするんですね。

（次ページにつづく）

資料⑩　第6回むのたけじ反戦塾（2024年1月20日）の記録　（6）

沖縄と連帯するってことになると、いま先島諸島にミサイル部隊が、自衛隊が配備されていますよね、で、トマホークを買うって言ってますから400発、いまPAC3と言う防御用の迎撃ミサイルなんですけども、トマホークが配備されたら中国本土に届くミサイルが、石垣島や宮古島に配備されたらですね、多分大変なことになると思うんですね。中国は非常に緊張関係高めてくるでしょうし、日本もですね。私の感触としても市民運動、市民連合とか、総がかり行動実行委員会が頑張って 国会前とか、今度新宿であのアクションがあるらしいんですけどね。参加する上で 私はこの自衛隊軍縮というステッカーをずっと持って、宣伝しようとできれば以前もちょっと話したんですけど、私の地元の東大宮駅で芝浦工業大学の学生たちに訴えようかなという風に考えてます。
（1：07：10）

註⑩：具志堅隆松：遺骨収集ボランティア･ガマフヤー代表。『ぼくが遺骨を掘る人「ガマフヤー」になったわけ。合同出版・2012年・遺骨は沖縄戦の証言者―。30年間、沖縄戦の遺骨と戦争遺物を収集・記録してきた著者が語る沖縄戦の真実。ドキュメンタリー映画『骨を掘る男』（奥間勝也監督）2024年ポレポレ東中野公開予定

●K.S.
日野市から来ました。ちょっと二つのことを申し上げようと思うんですけど、いまの方の話につなげると、私も軍縮っていう言葉、すごくいいんじゃないかっていうキーワードとしてですね。あんまり運動の中で使われませんけども、なんか昔のね、ワシントン軍縮条約とそういうイメージしかなくて、現代の日本においてどうなんだっていう形で提起されるっていう事があまりないわけですけど、もちろん自衛隊を一挙に無くすとかですね、そういう全否定できればある意味、理想的なのかもしれないですけど、そうそう現実的には難しい中で、軍縮って英語で確か、デスアーマメント（disarmament）ですよね、だから軍をちょっとだけ減らすと言うよりは、軍備を否定していくというそういう思想が根っこにあるんじゃないかなと思うわけです。そういう意味でも軍備縮小、軍事力を否定していくのをどうやって実際に進めていくのかっていう意味でいいキーワードなんじゃないかって感じが個人的にしています。
それとの関係で、もう一つ今ちょっと気になっていることがあって、これはあの皆さんのご意見があれば伺いたいんですけど、能登のああいう震災があってですね、 つまり救援、災害復興とかっていうこと、自衛隊がものすごく動員されて、まあある意味での活躍をしていますよ。それを映像、テレビなんかで連日のように見ていて、ちょっとこうはっとさせられると言うか、思うのはですね、つまり憲法と自衛隊との関係っていうのを、どう位置付けたらいいのかっていうことです。
もちろん憲法学者の大半はその自衛隊違憲だということなんだけども、世論調査やると圧倒的に合憲という感じの中で、野党なんかはいろいろ今揺れてるっていう感じですね、あの、いろんな立場があると思うんです。まあどっちかって言うと私なんかは、自衛隊やっぱり違憲だろうと、つまり憲法の事実通りのですね、あの理解をすれば あれがつまりあれだけの規定を九条でやっているのに、自衛隊の存在っていうのは本来ありえないんじゃないかっていう意味ではつまり違憲に間違いないとずっと思ってきましたし、 今もまあどっちかといえばそういう感じでいるんですが、ただああいう災害救助みたいなことですね､大活躍みたいなことで、ものすごい危ないところまで入っていろいろやっていますよね、みんなで。そういう人たちに対してあんたたち違憲の存在だねって簡単に言えるかっていうね、そういう問題立てられるとですね、いやあの友達からそう言われたわけじゃないんですけども、なんかこう仮想の想定として、ちょっとこう非常にたじろぐっていうかですね、合憲・違憲論という二分法でいくと非常に難しい問題かもしれないという気がするわけです。
↗
じゃあどうしたらいいかって言うときに、まあ1つの考え方として自衛隊を否定してその災害救助隊みたいなものに作り変えるとか、あるいは半分半分にしてですね、半分は救助隊にしてっていういろんなアイデア的には見たり聞いたりしますけども、それもまあ現実的ではない､当面の現実的な答えとは言えないという中で、まあ私なりの今現在の仮の答えとしてはですね、こうかなと思うのは、つまり確かに違憲、法律的あるいは憲法論的には違憲だというのはまず押さえた上で、しかしその単純な議論では矛盾、 ある種の矛盾を含んでいると、つまりそれ自体に否定することによってああいう災害救助的な原理を行われている活動を否定することは難しいだろうという、できないだろうという意味で矛盾を感じる。だけどもその矛盾を超える、無くすために、九条の規定そのものを変えるとか、無くすとかっていう方向とどっちの選択肢がより良いかということで言うと、やっぱり九条を変えるという方は問題なんじゃないかと、そのままっていう規定でそれを理想として掲げ続ける形で、それに少しでも近づけていくっていう方向を目指すっていう、そんな感じがいいんじゃないかと個人的に思うんですけどね。でもまあこれはいろんなご意見があると思います。だからちょっと伺いたいなっていうことがひとつ。
で、そういう自衛隊の問題とそれが全然、別のこと、もう一つだけちょっと言わせていただくと、さっきの映像を見て思ったんですけども、つまり若い人たちとの関わりということ、さっきの高校生、定時制の人たちでしたけど、大学生との関係でっていうことでですね、具体的なちょっと経験をしたもんですから、それをご紹介したいと思うんです。私、たまたまむのさんと同じ東京外大を出ているんですけども、外大の去年の11月の大学祭っていうので戦争っていうものを取り上げて一つのプロジェクトが実現したんですね。それはたまたま去年が学徒出陣 80周年っていう節目でもあり、これももう1つはたまたま外語大って言うのの前身ができてから、ちょうど150周年だっていうことで大学としても、なんか変わったことをやりましょうっていう動きがあってそれに答えて学生が、つまりまあ 10人ぐらいのあるゼミの学生たちがですね「戦争と外大生」っていう､これチラシなんですけど、こういうポスターもこう言うでかいポスターを作ったりして、「戦争と外大生」っていうプロジェクトを去年の初めぐらいに立ち上げて、それに卒業生、OB の有志も少し協力しようっていうつまり歴史的なことなんで、過去のことも多少とも調べる上で協力しようということで、数人の、私自身はほんのちょっとしか関わりませんでしたけど、とにかく去年初めからその11月下旬のその大学祭でのいろんな5日間､大学祭あるわけですけどね、その間いろんな展示やら映画の上映だとかですね、講演記録の映像の上映だとか、いろんなことをやったわけです、で、何が言いたいかって言うとですね、多少、横から見てて、いまの大学生ってどれくらいの人が、こういう問題で動いて調べたりするのかとも思ってたら これがものすごくみんな熱心にですね、よくやったんですよ。 いろんな資料にあたって、「戦争と外大生」っていったって問題が大きすぎて、実際には3人の、ちょっと注目すべき人の人たちが戦争の中でどうなってたかっていうのをいろいろ探ったんです。その一人だけ言うと芥川龍之介の息子っていうのが、外大生だったわけですけど、戦争で亡くなるというので、この人が実はものすごいやっぱり作家的な能力持ってたんですね、これがいろいろ実は調べてみると作品が残ってるっていう風な、まあそういうとこまで含めていろいろやった、その調査のありようも感心しましたし、ま、なんていうか楽しみながら、しかもネットを使っていろんな情報公開やりながらやってるのも全部こう見えるわけですけども、なかなかすごく「今時の学生は」なんてちょっとね、否定的に僕なんかも見ちゃうわけですけど、ちょっと違ったかもしらんなっていう感じになりました。
（次ページにつづく）

資料⑩　第6回むのたけじ反戦塾（2024年1月20日）の記録　（7）

で、結果的にですね、ものすごく分厚い資料集なんか作ったりしていろんなことがあったんですけど 1つだけやっぱり驚いたのは、つまり実際にあるまあ大学の一つの教室に展示を、つまりパネルをですね、いろんな形でその3人の人たちの人生っていうかな、それをこういろいろ残したものやなんかを展示したりしたその部屋にどのぐらいの人たちが見に来てくれるかなっていうのが心配だったわけですね、大学祭のいわば、かたいテーマの展示の部屋なんて私自身の大学生時代の経験からすると、本当に人が来てくれないわけでですね、ま、せいぜい5日間で100人ぐらい来てくればいいのかなと思ってたですが、結果的に全部、参加、見に来た人の数字はチェックしてたんで、トータルでなんと1500人も来ちゃったんですね。これも驚きました。

もちろんラッキーな要素はいろいろありました。ま、学徒出陣80年というテーマのためか、新聞が結構ですね 朝日、読売、毎日何かが大きくその展示「戦争と外大生」という発表そのものをかなり紹介してくれたっていうこともありますし、天気も良かったし、もちろんウクライナとか、ガザとかっていあいう動きからするその戦争への若い人の関心ということもあったんだろうと思います。いろいろ重なったんでしょうけど、とにかく1500人も見に来てくれたっていうそういうことでちょっと感激してしまったっていうことで、そんなことがあって、何が言いたいのかってですね、若い人のですね、さっきは高校生でしたけど、大学生って言ってもなかなかちょっと捨てたもんじゃないなというそういう観覧者っていうのはもちろん学生だけじゃないですけども、でもほとんど若い人が来てたっていう感じがあるもんですからね。そんなことをご報告したいと思いました。

●R.S.：外語大の学長、いま女性ですよね。

●K.S.：
学長、そうです。だから学長さんもかなり一生懸命、それで、学長が選ぶ、全体の大学祭の中のいろんな催しの中の表彰って言うので、それをわれわれこの「 戦争と外大生」っておみやげっていうかおまけもつきました。

●R.S.：いま7大学が女性なんですよね、学長は。
（ 1：18：30）

●T.K.：
埼玉から来た菊村です。先程ビデオを観て思い出したのは、土方巽っていう舞踏家ですね、舞踏を始めた方ですけど、いらっしゃって、昔その人の話を聞いたときに、 土方さんというのは秋田ですね、秋田工業高校のラグビーで有名な、そこのラグビーやってた方なんですけどね。上京して踊りの方に転向して、ダンサーになって舞踏の創始者にまで人なんですけど、その人がやっぱり、語り、語りの仕方がね、むのさんみたいにね、わかる感じじゃなくて、もっとこうマイペースというか、非常に詩的な言語を使って、秋田弁から非常に分かりにくいんですけどすごい熱のこもった語りをする人でした。秋田の人に聞くと、そういう人いるよって言う向こうの独特のそういう伝統があるのかなと勝手にそういうふうに僕は思ったんですけどね。

きょう話したかったのは、立川のシビルというNPOがありまして、そこの講座ですね、去年、水木しげるをテーマにした講座がありまして、ぼくはそれに参加したんですけど、その時に同じく参加された、あ、その水木しげるの講座の先生は、加藤晴康さん(註⑪)ていう先生で、前、大杉栄もテーマにして講座を持ってやられた方なんですね そこにまあ参加されてきた加藤さんのお友達で押田伸子さん（註⑫）っていう方がいらっしゃって、この押田さんからいろいろ教わった中に「じゅっぺい」ていう、じゅっぺいのジュっていうのは忄（りっしんべん）に血という字を書いて、兵ですね。「恤兵」ていうのは、僕はまったく知らなかったんですけど、そういう言葉が要するにもう80年前ぐらいには普通に使われてた言葉なんですね。恤兵という言葉は。いわゆる慰問活動ですね。戦時中、慰問活動をしていた、そういったことを、「恤」というのは。「めぐみ」って言う意味なんですね。　↗

海軍恤兵部、陸軍恤兵部って形でちゃんとそういう組織があって、活動していたって言う歴史があるんですけど、そういうことが全く今までその表沙汰にならなかったというか、すっかり忘れられていたのを、押田さんが掘り起こしたというか、そういうことを、まあ本にして、その語られたことを僕自身が全く知らなかったということが、やっぱり日本のそういう近現代史というか、それをそれがあの全く表のこと裏にまだ知らないことがとにかくまだいっぱいあるのではないかという感想ですね、あらたに調べ直して、学び直さなければならないなっていうことを感じました。（1：23：03

(註⑪)加藤晴康さん：横浜市立大学名誉教授。東京大学大学院で西洋史を専攻。フランス社会思想、社会運動、植民地関係史を主に研究。横浜市立大学名誉教授。　『ブランキ革命論集』（現代思潮社／訳編）、『歴史として、記憶として―「社会運動史」1970-1985』（共著）などがある。シビル市民講座「自伝から読む歴史」をずっと担当している。
（註⑫）押田信子さん：中央大学経済研究所客員研究員。出版社勤務を経て、2008年、上智大学大学院文学研究科修士課程修了、2014年、横浜市立大学大学院都市社会文化研究科博士課程単位取得退学。専門はメディア史、歴史社会学、大衆文化研究。著書に『兵士のアイドル』（旬報社）『抹殺された日本軍恤兵部の正体』（扶桑社新書）、共著に『戦争と芸能』（小社刊）などがある。

S.H：
「散歩クラブ」っていうお散歩会なんですけど参加してます。江東区から来てます。この前の日曜日14日なんですけども、我々「隅田川七福神めぐり」っていうのをやってきたんですね 。一番最初のお寺さんは、どこかって言うと、多聞寺（たもんじ）って言う多くを聞く寺、小さい声に耳を傾ける大きい声の寺と書く多聞寺っていうところに行ってきました。そこの塀の前に憲法9条がなんと掲げられているんですね。で我々が行った時に、たまたまご住職さんが出てこられて、われわれの方にいろいろと説明してくださったんです。この意味はですね、不殺生の会、不殺生の戒め、不は不問にふすの不、 殺生は殺す生かす、 殺生の戒め、てのが昔から仏教の方にはあったんだよ、 何も憲法9条ってことをやってるんじゃなくて、その教えがここに活かされてるんだってことを教えてくださって、僕ら非常に感銘を受けましてですね。帰ってきたんですけど、 今日の映画のドキュメンタリーも、とってもいいことでございましたけれども、あの中で言ってらっしゃるのは、ヒトが人を尊ぶ、尊ぶ（たっとぶ）そういう人間関係を作っていこうじゃないかってことを強調なさってました。

ところが今見るとですね、戦争って言うのはですね、 人が人と思わない、 一番有名なのは、イラクとか、ベトナム戦争がそうなんですけど、アメリカ兵は何をやってるかっていったら、チューインガムを噛んで耳が聞こえないようにして、スピーカーでジャズ、あるいはアメリカ音楽ですね、ガンガン鳴らしてですね、ベトナム人とか、イラク人とか、そういう人を人間と思わない、ゴキブリか、ハエのように扱って殺してしまう。こう言う虐殺が起こるわけなんですね。だからこれはむのたけじさんのお話を聞いてですね、何か僕は、人間中心主義じゃない別の新しい価値観を今こそ、ここで押さえていかないと、不殺生不殺生というのは人間だけじゃない、動物や木や植物、そういういろんなモノが含まれるわけですよね、それを含めて我々はやっていかなきゃならないんじゃないかなあって思って、14日日曜日、過ごしてまいりました。で、その多聞寺の境内の中に、実は、ご存知かもしれませんけど、映画人の墓って言うのがあったんですね。その映画人たちの方のお墓があるんですけど、その上の方にですね、榎本健一があるんですね、エノケン。これが15日の月曜日から、何と何と朝ドラ『ブギウギ』の中に出てきてですね、びっくりしましたけども、榎本健一、エノケンと福来スズ子の笠置シズ子が今、いい面白い番組をつくってくれています。

（次ページにつづく）

資料⑩　第6回むのたけじ反戦塾（2024年1月20日）の記録　（8）

NHKもプロデューサーも、一生懸命がんばっているなと、いろいろ若い人たちに向けてどうのこうのって言うのはあるんですけど、このエノケン、 笠置シズ子って言うのが戦後、喜劇の王様、エノケンがですね、戦後なんですけど、その戦後がですね、何年かたつとすぐ右旋回していきますね。右旋回して、だからあの時なんです。「戦争が終わった」っていう感じの日本人がどんどんどんどんと、今現在、このざまじゃないですかねですかね、マスコミは何やってるんだろうかなて言うふうに思いますけれども、能登にしろですね、全然報道されていない。能登半島地震のいちばんの大きな問題点は、志賀原発です。志賀原発の方は、地下に断層なんてないよっていって、今まで原発なんて作れないって言ってたのが、急にまあ財界ですね、政界のあれによって志賀原発が稼働して現在東日本大震災のためストップしてますけど、今後はどうなってくるかわかんないですよね、こう言うですね、マスコミ、報道してるんですかね。まさにほとんどの日本人はですね、三猿っていうんですかね、見ザル、聞かザル、言わザルっていうふうにさせておこうじゃないかって言う今の岸田政権なんか、とてもじゃないけどね信じられないってことが、我々今回多聞寺行きましてね、感想なんですけどいだいてきましてですね。
で多聞寺の殺生の戒めというのは仏教であると、仏教を信じているのが、もしかして創価学会、であるならばですね、なんで創価学会、公明党が、ああいう軍国主義に走っている岸田政権とくっついているのかどうか、と言うのも疑問でしてね、 こんなことをいろいろと考えて、おしゃべりして行ければいいなと思っています。（1：28：45）

S.A：
立川から来ました。立川ということでちょっと3つあるんですけれども1つは、前から申し上げてますけれども、私の今の最大の関心事の一つが有機化合物PFAS（ピーファス）による地下水の汚染でして、年明けてから動きあまりほとんどないんですけど、PFASに関心があるということで最近1冊の本を読みまして、あの読んだ方いらっしゃるかもしれませんが、「日米地位協定と基地公害」（註⑬）という岩波書店から出てる本なんですけれども、これを読んでわかったのが、PFASのとんでもない話なんですけれど、実はPFASに限らず、戦後アメリカはもう基地公害っていうのをばら撒き続けて来たっていうことが非常によく分かりまして、例えば立川に関して言えばですね、実は東日本大震災の時に米軍が「ともだち作戦」の時に、やっぱりそのアメリカの空母とかですね、乗組員が被曝してですね、その時にその除染するのに使った用具とか、低レベル放射性物質がですね、実は今も横田基地に保管されてるとか、いろいろ出てくるんですね、基地ですので、ジェット機の燃料の中に、実は燃料自体も非常に有害物質で、かつ有害な燃料の中に、いろんな その有害な化学物質が入ってて、だから燃料もれって言うのは、単に燃料が漏れただけじゃなくても有害物質をばら撒いてるんだっていう、それ一例ですけれども、いろんな声が書いてありまして、私は今まで、その基地があること自体はそれはいいんじゃないか、もちろん騒音なんかの問題があるにしてもですね、騒音が低減されたりなんかされればすむかもしれないと思ってましたが、この本を読んでわかったのは、基地があること自体がもう存在悪というかですね、公害をばらまいているんだと言うことが非常に良くわかりまして勉強になりました。是非ちょっと購入して読んでいただくといいんじゃないかなと思います。米軍基地の対する見方や考え方がちょっと変わるんじゃないかと思いました。
それから立川に関して言うと、土地利用規制法、2021年に成立した土地利用規制法って、米軍基地とか自衛隊基地とか原発の周辺とかを注視地域とか特別注視地域とかに指定してその注視地域に指定されると、地域に住んでる土地の購入者であるとか、賃貸に住んでる人とかですね、それも基地とかの敷地周辺1km以内に住んでる人たちが調査の対象になるんですね。誰が住んでてとか、国籍とか、まあなんかいろいろあるんです。今のところはその氏名、住所、国籍、確かそんなもんで調査対象は政令かなんかです。定められてると思うんですけれども、それは政令ですから閣議決定でいくらでも変えられて、その調査対象がですね、例えば交友関係になったりとかなんとかっていう、渡航歴とかですね、そんなことに拡大する可能性も否定できないわけですね。
それからその特別注視地域に入ると、土地の売買とかするときに事前に確認をしなきゃいけないとかですね、
もう一回注視地域（の話）に戻りますと、基地の機能を阻害するような行為に対して禁止命令を出せると、それに違反した場合には、懲役3年だったから懲役3年以下の罰金もしくは200万円以下の罰金とかになってですね、そう言うのになってですね、要は立川で言えば、砂川闘争の時はその米軍基地の周辺、米軍立川基地のまわりで、やぐらを立てたりとか、旗を立てたりとかして、あそこでみんな抗議運動とかやってたんですけど、今後はもしかしたらそのやろうとしてもですね、それは基地機能を阻害する行為だということで禁止命令が出て、みんな禁止命令違反で逮捕されたりとかですね、非常に今、危機感持っています。法律そのものはずっと前に2001年かなんかに制定されてるんですけれども、その地区地区、地域指定というのを進めてきてまして、去年の12月26日に第4弾が、その地域指定の第4弾が発表されまして、その中で、立川について言えば、横田基地、陸上自衛隊立川駐屯地、陸上自衛隊東立川駐屯地の3箇所は指定されてですね、多分、立川市のほとんどの地域で指定によって含まれちゃうんじゃないかなと思うんですけど、そういう状況になってるんで大きな危機感を持ってます。
あと3点目が、さっき砂川闘争の話をしましたが、今週の月曜日に東京地裁で砂川事件の国家賠償請求訴訟がありまして、予想通りではあるんですけれども原告の請求が棄却されました。新聞でご覧になってらっしゃいますか。傍聴に行かれた方いらっしゃいますか。もう始まって30秒もかからなかったですね。「判決を言い渡します。原告の請求は棄却します」って、確かそんなだったと思います。100人近く入る一番多い法廷、東京地裁の中では一番大きな法廷で開かれまして、もうぎっしりです。傍聴席も全部埋まってて、そんな判決でしたから、当然、傍聴に来ていた支持者の方からは怒声が上がりまして。「裁判長逃げるのかっ！」って言って。声が上がりまして、そういうことあまりないと思うんですけど、その裁判長もまさにほうほうの体で逃げるようにして出ていきました法廷から。この裁判、棄却されるだろうというのは、想定の範囲内、そうなるだろうとみんな予想したと思うんですけれど、やっぱりいくつもひどい点があって、1つは 最終弁論で言うか、原告側が意見陳述をする機会があったんですね、それは判決が出る2つ前の法廷だったんですけれど、その意見陳述の後、裁判長が変わったんですね。判決を直前にして、裁判長が変わったりとかで、それまでの裁判長っていうのは非常に丁寧に裁判を進めてきた方で、原告の意見にていねいに耳を傾けてですね、原告が意見言いたいと言えば、言えるような場を設けたり、いろいろやってたんです。その裁判長がいきなり判決を直前にして替わったり、こう言う事件なので、再任される裁判官がいるんですが、最終的には3人全員変わったんですね。初公判から。それからの原告側がその最高裁長官がアメリカ側とつるんでたという話なんですね。公平な裁判所による公平な裁判を受ける憲法が保障している公平な裁判所の裁判を受ける権利が侵害されたと、だから国は賠償しろっていうことでやった裁判なんですよ。原告側が最高裁長官と米側がつるんでいたということを証明するための証拠としてアメリカの公文書のコピーを提出したんですけれども、法務省、国側ですね、それは本当に公文書かどうかわからないと主張しまして、原告側は、「じゃあアメリカ側に請求してくれと、政府の正式ルートで、アメリカ側にその公文書を請求して、これはアメリカ側の公文書に間違いがないことを証明しろ」と証明できるようにしてくれと言って、原告側がお願いして、裁判長も分かりましたと、じゃあ調査嘱託と言うらしいんですけど、アメリカ側にその調査を求めますってことで、裁判長が初公判から判決まで、多分2年とか3年とかかかったはずなんですけれど、結局その公文書は来なかったんです。これは最高裁が止めたのか、外務省が止めたのか分かりませんけど普通だったらそんな2年も3年もかかって文章が来ないなんてことありえないと思うので、非常に恣意的なものが働いてたりとかですね。

（次ページにつづく）

資料⑩　第6回むのたけじ反戦塾（2024年1月20日）の記録　（9）

　文書が来ないことに対してそれはおかしいじゃないかって原告側の弁護士が最高裁に対して、その手続きの関係書類の開示請求をしたんだそうですね。なんですけれども、この開示請求に対しても、その1ヶ月の間にしなきゃいけないらしいんですけれど、これまた延長、延長でいまだに書類が来ていないと、自分たちがそういう手続きを遅らしてきたことが、ばれるのをまた遅らそうとしてるみたいなことをやってるみたいですね。
　とにかく国、 裁判の信頼性とか裁判の公平性というものが問われてる裁判であったという意味で、そこでもまた信頼を裏切るようなことや公平性をそこなうような裁判だったという意味で非常に最低の裁判だったというのがありました。

註⑬：「追跡日米地位協定と基地公害―『太平洋のゴミ捨て場』」と呼ばれて」ジョン･ミッチェル著・阿部小涼訳･岩波書店･2018年5月。

●：それを新聞など、メディアはとり上げてないのでしょうか？

S.A.：昨日か、一昨日の東京新聞の社説の中で、まだ読んでないんですけど、書いてありました。

●：メディアだとそう言うの取りあげないんですよね。裁判だとほんとうに。原発のこともよいところだけですね。

S.A.：
　そもそも今回の裁判は、最初から傍聴していた司法担当の記者は一人もいませんでしたから、判決だけ聞いていてもそれはわからない話なので、東京新聞の社説をまだ読んでないんでどこまで書いているかわからないんですが、司法担当の記者は書かない、書けない、で、論説委員も当然来てないから書けない、そういうことで、あと、新聞は劣化した、劣化したって言われますし、私もそうだとずっと思い続けてきたんですけど、最近1988年頃の政治の記事を読んでいるんですが、そうするとですね､実は昔はもっとひどかったってことがわかりまして、もっとひどかったというか、ほんとうに表面の記事しか報じてませんでした。1988年の頃、竹下内閣の頃で言いますと。今の方が実は、裏話も含めて政治記事なんかは深く書いている。立ち位置の問題なんかなと思うんですが、そんな気はします。

●:その東京新聞て、今日の新聞ですか。

S.A：いや、昨日の朝刊だったと思います。

Ｙ.Ｏ.:
　ちょっと今日、用事がありまして、途中からの参加になりました。中央区から参りました。実はちょっと今問題になってることがありまして、浜町公園ってご存じですか、明治座の近くにある､隅田川沿いにある大きな公園です。関東大震災の後にできた震災復興公園のひとつでございます。そこで今ちょっと問題が起きております。それが今、住民の間で問題にならないのが問題なんですけど、そこに中央区に公立の日本橋中学校というのがあるんですが、それがなんかちょっと今､中央区は人口増えてきたんで、校舎を建て替えたいというので、それで仮設校舎が必要になったというので、その公園の一番南西の角に仮設校舎を作ろうとしてまして、校舎を作るためには大木を 30本ぐらい引き抜かないとならないんですね。そういう工事が今1月から始まっております。これはその過程なんですけれども、実は全然、区役所がきちんとしたことを知らせないできてるんですね。で､このままじゃダメだって言うんで2回誓願を出しました。どうしてもやっぱり私がやんなきゃダメと言うことで。でもまあ見事に区役所に跳ね返されました。一番ちょっとやっぱり腹立たしいことというのが、区役所側が全然ちゃんとした情報を出さないんですね。いろいろ交渉している途中経過だけでも報告してよって言っても、決まってないから誰も出せませんて言うことです。それで今度は決定したら決定したことだから動かせませんて言うことを平気で区役所が言うわけですね。これ 全く理不尽なことが続いてます。
それと区議会の進め方ですね、区民が傍聴しようとしても、区議会、市議会いろんな委員会ございますね、その中で、傍聴しようとしたら遅刻したからと入れてくれないですよね。開会の10分前に来なければダメだと言うんで。私の知り合いの人が傍聴に来たのを追い返されたんですね。事情があって遅れてきたら。それって聴いたことがありますか。同じ区議会でも本会議は出たり入ったりが自由なんですよ。ところが委員会は区民が来ても遅れてきたら追い返されるというこんなバカなことがあるわけなんですね。これやってることが江戸時代と変わらないんじゃないかと言うことを思っています。
　公園のことで言うと、いろんな情報を得まして、日比谷公園もちょっと危ないことになってるんですね。なんかそこに三井不動産がなんか大きなビル建てましたよね、あそこから三井不動産の方のビルから日比谷公園をまたいだ歩道じゃなくてオープンデッキっていうのかな、デッキが二本 かかるって言うんですよね。あそこに何か書ける必要無いんですよね。横断歩道もうひとつ作れば良いだけの話だし、あるいは地下道を通ったっていいんですよ。それなのになんか三井不動産のために、わざわざ橋をかけたりとかそういうこともあります。
　神宮外苑のことは結構話題になってますけれども、東京都内だけではなくてなんか全国各地じゃなくて街路樹がだいぶ犠牲になって､公園か、だいぶ犠牲になってになっていると言うことが一部の大企業がつるんで進められてるような状況です。 ところが、東京都にしても、区役所にしてもなんかあんまりちゃんとした住民のあれの声に答えないわけですよね、
　たまたま昨日は杉並区のことをNHKが紹介してましたけど、ああいう風にまだちゃんと情報が公開されたり、みんなの意見を聞くと聞いたり、専門家ですか､大学の先生とか、そういう方の意見を聞くというのならばいいんですけど、そういうのに全然耳を傾けないで、なんか行政は誰も誤りがないからもうこのまま 話を進めていくことが今進んでます。これで次の都知事選ですね。小池さんに言いたいこと言わなきゃいけないなっていう風に感じてます。（1：46：00）

司会：簡単にまとめをさせていただきますと、さっき自衛隊と憲法の話っていうのが1つの問題提起としてすごくわかる話で、認識あるいは感覚的にどう考えたらいいんだろうっていうことでわかる話であると思います。次の会とかでもですね、むのさんも憲法についての話は随分されてますので、そういったところで ちょっと引き続き考えていきたいと言いますか 自分たちのこう思いを出してやっていきたいなと思いました。

＊『エイジングブルー』の試写会、4月の映画祭の案内など

　それから皆さんのお話の中で、本の紹介とかですね あるいは映画があるはずだっていう話でもいいんですけれども、そういったことを聞いて、できるだけこの書き起こしと同じでその中に脚注として、これはこういう映画だとか、こういう書籍に書いてあるとか、あるいはこういう新聞のこの記事で見たってことでもいいんですけれども、そういったものを気づかないで見過ごしてしまうことが多いんで、できるだけお互い助け合ってですね、こういったのに載ってるっていう話の中で著者名本の名前がわかれば、そういったものをまた積み上げてって言いますか、そしてここにも来てない人も含めてどんどん記録として出していく、そしてそういったものは自分でこう調べようとすれば調べられるんだよ、さっきのあの立川の3つの問題にしてもですね。 そういったことを、お互い出し合っていくっていう会は続けていきたいと思っています。

S.A： 9条云々というのはどういう問題提起だったんですか？

資料⑩　第6回むのたけじ反戦塾（2024年1月20日）の記録　（10）

K.S.：私が言ったのは、能登の震災の後ですね、自衛隊が活躍して災害救援とかその復興にいろいろ動いてるというのを連日テレビで見たりなんかしてると、これを違憲論ということでね、自衛隊の違憲の存在っていう風な見方だけで、単純に周りの人なんかと議論ができるかなっていう難しさがあるだろうと、そういう時にどう考えるべきか、合憲論、違憲論いろいろあるけども、私としては個人的にはとりあえずこう思うけども、皆さんどうですかって。形に問題あるけどつまり違憲論に私、基本的には立ちながら違憲っていう風なことだけでは、その災害問題では議論になりうるところが当然あって、だからといってその憲法を変える、9条の規定を変えるよりは、その矛盾を抱えながらしかしその理想を追求するっていうのは取るべき道ではないかなんて思うんですけども、さてどうでしょうかと言うことを申し上げたつもりなんです。
（1：54：30）

●＊＊：
この間、日野市の「憲法リレー講座」（註⑭）に行ったんです。そのテーマはですね、憲法の先生が意見付き改憲論、立憲改憲論、改憲に関する議論をする講義があったんです。説明しきれないんですけど、稲正樹（註⑮）先生なんですけど、憲法学者でいろんな憲法学者が言ってる改憲論、違憲だからとかね、立憲の立場からと説明してる講義がありました。解説できないんですけど。日野市のゆのした市民交流センター、あそこの勉強会で。
（1：56：00）
(註⑮)　日野･市民自治研究所2023年度憲法リレー講座
https://hinojichiken.wixsite.com/info/2023kempo）
（註⑯）稲正樹先生：国際基督教大学元教授･憲法学。日野･市民自治研究所けんぽう憲法リレー講座でのテーマ「憲法の軍縮平和主義から見た平和主義の現況」

司会：
　確かにある自衛隊のことっていうのは、どうしても我々の感じるところで違憲であるってことも含めて、だいたい一致してるし、それが間違ってるとかなんとかっていうふうなことではないんですけれども、本当に若い人たちと話をすると自衛隊否定っていうのがいったい何の話なのかっていう風な対応を取られてですね。若い人って言っても、もう50代ぐらい迄そうなんじゃないかなと思うんですけど。問題っていうのを、ちゃんと教えられてないっていう事実があるかと思いますが、その反面、非常に自衛隊、国側もいろんな形でもって、それこそ復興支援みたいな形のことを非常に自衛隊の意味があるっていう風なことで言っていて、片や、すごく隠しているというか、明らかにしてない部分もすごく多くなってきてるっていう気がするんですね。本当に例えば 沖縄の沖で自衛隊機が落ちて、何人か死んだというのを、後の報道があんまりわからないんですね、もうちょっと普通あれだけの死亡者が出たらばどういう原因だったのかとか、どういう人たちだったのかとか私がたまたま新聞で読んでいないで、報道では追いかけられるかもしれないですけれども、すごく素朴な疑問としてもっと知りたいなっていう一体何があったんだっていう米軍のオスプレイの話もそうですけど、なんかその時は話題になるんですけど、その後のフォローが全然ないという感じがして、そういったのも、ちょっと自衛隊っていうものに対しての考え方は、あんまり硬直したものじゃなくてもちょっと疑問なものっていうのを出し合って、今の「戦争に向かう」っていうことだけじゃなくて、「じゃあいったいどういう風になるんだ、自衛隊がどういう風になるんだ」ってことなのかということも」話を詰めて行ってもいいんじゃないかなと思ったんです。　（1：58：30）

武野：
　さっき言いましたけど市民運動、何かやっぱり勉強しないですよね。私自身があまり勉強してないというか、この分野に入ってきたのが、ずっと歳とってからなので、勉強してないんですけれども、本当はあの市民運動の人たちは、もう少しこうやって議論することをした方が良いと思うんですよ。
そうしないとやっぱり勝てないってばおかしいですけれども、そういうような思いは、この会まあどちらかでもそういうような何かやるって言うんじゃなくて、この中でみんな勉強して、こんなんだよっていうのを言ってきたいってそういう思いが非常に強いんでちょっとそういう感じを持ちました。

●M.T（？）：
　あの、ここで、総がかり行動実行委員会の主催で高田健さんの講演会、学習会があったんですよね。その時に質問で高田健さんにもっと自衛隊に手を突っ込んで利用した方がいいんじゃないですかって質問をしたんですよ。ただなかなかその辺はですね、あまりはっきりした答えがなくて、昔、社会党が元気だった頃は、安保条約についても、自衛隊についても、すごい議論があったけれども、近ごろは確かに具体的な議論てないよね、と言うところで終わっちゃったんですが。それで憲法議論なかなか難しくて、つまり 2015年に集団的自衛権の容認の閣議決定がされてしまって、それにもとづいて自衛隊法改正されて、世界のどこでも集団的自衛権を行使できることに法的になってしまうんですよね。
　だから今度の敵基地攻撃能力保有論も、そういう宣言がされてしまって トマホークを買ってしまうと400発、中国本土、北朝鮮、ロシア届くような巡航ミサイルをこれから配備するわけですよね。お金払って2025年度に配備されると思うんですけども、もう昔の憲法論議でしたら攻撃用のミサイル持っちゃいけないとかですね、空母を持ってはいけないということだったんですね。でも空母、「いずも」「かが」が空母になってきてますので、 これも27年に配備されるのかな、もう結構越えちゃってるんですね、いまの自衛隊は。だからこれって、実際にトマホーク配備されたり、「いずも」「かが」が配備されたときに、有権者がこれは憲法違反であると、訴訟は起こすと思うんですけど、今訴訟を起こしてもまだ配備されていないので、「訴えの利益」がないから却下されちゃうと思うんですけどね。だから今の司法の動きだと、憲法論を仕掛けてもですね、うまく進まないんじゃないかなという感じがして、 もう憲法を越えてしまっていると言うことになると、どういう議論が市民として抵抗できるんだろうかっていうのは、やっぱり専門家のお話を聞いてみたいですね。
（2：02：30）

●＊＊：
　去年か、1月か2月に、飛び込みチラシで、自衛隊募集のビラが来たんですよ。びっくりしてまわりには聞いたんですけどね。去年は昭島で中学校に対して自衛隊のため自衛隊はこうだよっていう宣伝があったと聞きました。自衛隊隊員に対するすごい募集攻勢をあの手この手でやっているとのがあるんで、ほんとうはそれ情報公開してやった方がいいかなと思ったんですけどね。

●司会：
今の状況って本当にどっかで小競り合いであっても自衛隊員が死ぬ状況、イラクの時にもちょっと話が出ましたけれども、そういう状況になると世論っていうか、社会の自衛隊員に対するものが全く変わる、今のまま行って、例えば何でもいいんですけど、戦争状態に近いところで隊員がが負傷する、まあイラクでも実際負傷しますけれども、そういったことで一変するような危機っていうのは、皆さんよくわかると思うんですよね。　ほとんど戦前と同じで、あるいは戦争している国と同じで、「戦争なのにそんなこと言ってるか」っていう風な、今、現在として 2015年以来 集団的自衛権でも戦いはできるんだっていう風になってる状況の中で、実際の戦いに対して「いや、そんなことはない。やっぱり戦争はダメなんだ」って言うこと自体も言いづらくなる、言えなくなるって言うふうに変わっていく。 それはみすみすそういったことが起きるのを待っているって言っては変ですけれども、そのような形でどんどんどんどん押してくるようなことに対して、自分たちは何も、今準備してないわけですよね。（次ページにつづく）

資料⑩　第6回むのたけじ反戦塾（2024年1月20日）の記録　（11）

だからちょっと言葉がうまく言えないんですけれども、やっぱり自衛隊のこと、自衛隊､あるいは軍隊ってっていうのが一体何なのかっていう認識を若い人も我々もちゃんと使ってないって言いますか、先ほどインドネシアとか、いろんなところで軍隊がやってきたことの話はありましたけれども、知識としては知ってるけれどもじゃあ今の自衛隊=軍隊ですよね、軍隊がこれからどういうことをやる危険性があるのかっていう風なことについて、何のあの準備もイメージも持ってないんじゃないかなって、やらなきゃいけないってことじゃなくて、やっぱりそこんところをそれぞれどう考えているのかっていうようなことをちょっと深めていけないかなと思うんですけれども。そういった意味で自衛隊のことを考えようっていう意味で、自衛隊の何を考えようかっていうことは、なるべく、もしそれをテーマとして考えるんだったら、あらかじめ出して考えていただきたいなと思っています。

●＊＊：
今お話しの中で、ちょっと思い出したんですけど。
僕は千葉で勤めてたもんですから、＊＊＊さん（？）とかこう行くと、意外とその募集のチラシとかありますよね。ちょっと僕退職間際だったんで、しかも＊＊＊(？)に所属してても、直接なかったんで。ちょっと今は危惧したのはですね、あの手この手で返してくるんですよ。それも、前だったら教育現場で、来ないですよね。ところがですね、びっくりしたのは、今、「卒業生の話」とかそういうのがあるんですよ。そこで、自衛隊の卒業生が来るって言う、これはびっくりしてそれまずいんじゃないと。教員がだいたいそういうものに抵抗なくなって、問題意識はなくなってるのですよね。その時は阻止しても、その次の年、入ったかもしれないし、ちょっとやっぱり今、それこそ高校の現場が今どうなってるか調べたことないんで、そういうある意味ゆゆしき状態がやっぱり出て来たのは確かですね。（2：08：40）

●H.H.：
僕の感想といたしましてはですね、諸悪の根源は先程ご紹介にありました「日米地位協定」にあるんじゃないかと思ってますね。日米委員会ていうのは国会より上､日米地位協定て言うのは憲法より上にある、この状況を変えないことには、どうしようもないっていうふうにですね､僕なんかは思っているわけなんです。トランプとか、バイデンとかああいうところじゃないって思いますけど、みなさんどう思われますかね。 (2:09:20)

●M.M.：
戦後の始まりでマッカーサーが言ったように、日本の国防は米軍が永続的に担うことになったということを、日本の政治のトップっていうか吉田茂が「そうですね」 っていうことでサインしてるわけだよね。約束してるわけですよね。で国防って言ったら戦争もそうなんだけど、 災害も国を守るっていうことで国防の業務の一つじゃないですか。その時に米軍として災害までやってられるかと。米軍の現地法人として会社といえば子会社として自衛隊を作らせよう、でもアメリカとしてその維持費を担いたくないと日本にさせようと。それがゆがんだ形で、今のようなことが起こってるんじゃないかな。だからあの憲法上は、国内法では憲法違反ですよ。誰がどう考えても。でも国のトップが約束しちゃってるわけだから、そっちの方が当然優先されるのが当たり前じゃないですか。それが起こってて思い込んでて、なおかつ日本の位置付けって、先ほどトマホークまで配備されたらっていう、あの国際連合ていったって、戦勝国連合だからだから、その中で日本だけが今、敵国条項がついてるんですよね。 国の頭に敵国条項がついてるって言うことは連合国に向けて不安をあおるような武器を向けてきたら、それを叩いていいと、責任は問われない、そういう条項なんですよ。
だから中国が宮古島にトマホーク配備したら、即、宮古島を廃墟にしても国連としては戦勝国連合としては責任を取らなくていい、って。それって普通そういうことじゃないかということじゃないかと思う私は思ってるんですけどね。 ま、前提が変わっちゃうかもしれないけど。

●S.A.：
先程おっしゃってた日米安保条約や日米地位協定が憲法より上に位置づけられているんじゃないかって言うのは、さっきの裁判の例じゃないのですけど、たしかに自衛隊のことでついても、それはそうだと思います。でも長期的には考えなくてはいけないんだと思うんですけど、それってそこを考えると絶望的になりますよね。ひとつは鳩山由紀夫なんかが結構ね、アメリカ側に対して抵抗しようとして結果的に言うと潰されたわけですよね。あの普天間の移転なんかの関係で。で田中角栄はほんとにアメリカに潰されたのかどうかわかりませんですけど、やっぱり石油利権をめぐってアメリカが嫌がるようなことをやろうとしていて、結果的にアメリカの、本来であれば日本の裁判としては証拠として認められないようなものが、証拠として認められて有罪判決が出て潰されて。日本の総理大臣はアメリカに逆らおうとすると、潰されるのかなってことが1つあるわけですよね。その中でじゃあ本当に安保条約､日米地位協定変えていけるかって言う、非常に悩ましいって言うか、問題があると思う。
それから、安倍晋三については、アメリカべったりでしたけど、でも今谷疑問に思っているのは、彼はアメリカ寄りに行きたかったのか、アメリカにその擦り寄ることで最終的に独立、アメリカから独立したいと思ってたのかもしれないと思うんですね。
今、日米関係って言うのは、なんだかんだ言ってアメリカに頼ってる部分があるので、その日本の安全云々っていうことを、最優先で考えた場合にはアメリカとは喧嘩（？）できない。あと、スノーデンでしたっけ、スノーデンによれば(？)日本の基幹産業のコアな部分て、全部アメリカに抑えられてるっていう話でしたよね。コンピューターとか。要は日本がアメリカに逆らった途端にコンピューター操作して、もう日本がもう機能しなくなっちゃうようにしてるみたいな、そういうのもあると、アメリカには逆らえない みたいなものが事実上あって、ひょっとしたらそういうのは日本の政府の首脳がみんな 承知してて逆らわないと思ってんのかもしれないという議論もありますし、 非常にその日米地域協定、安保条約、今のままでいいのかっていえば、これは絶対良くないわけで、長期的に言うと何とかして変えていかなきゃいけないと思うんですけれど、まあどういう道筋があるのかなとは思います。ただ後日米地位協定や安保条約に関して言えば、日本人は今知りつつありますけど、アメリカ国民はわかってないと思うんですね。なのでアメリカはなんだかんだ言って世論で動く部分もありますんで、積極的にそのアメリカ世論に働きかけて、アメリカ世論の中で、これおかしいんじゃないのっていう声を育てていくことも大事なのかなとは思いますね。（2：15：53）

●＊＊：
防衛大学校のことを急に思い出しまして、防衛大学校の初代校長の槇智雄という方の訓令集だったかな。中央公論新社から本になってまして（註⑰）。確か本になってまして。 それ読んでみたらやっぱり 実はその槇智雄という人、もともとはイギリス法制史の研究者なんです。慶応大学の先生から防衛大学校の校長だった方なんですが。その方が言うに、やっぱりもう本当に今の自衛隊は民主主義国家の自衛隊があって戦前の陸軍や 海軍とは違うのでってことを本当に口が酸っぱくなるほど言ってらっしゃるんです。
ほんとうにこれ読むと、世の中変わったんだと言うことがわかるんですね。それなのにに今の自衛隊は、なんかうまくいっていないというか、戦前のものをひきずっているんですけど。
でもこういう方が防衛大学の校長になったっていうことはちょっとやっぱり頭入れて 入れておいていただきたいと思います｡なんでこの人が防衛大学の学長になったかというと、吉田茂が、小泉信三に相談したらしいんです。誰が良いかと。それで、小泉信三が推薦したそうでございます。

（次ページへつづく）

資料⑩　第6回むのたけじ反戦塾（2024年1月20日）の記録　（12）

　それともう一点、今の国の仕組みなんですけど、内閣府が大きな役所になってしまいまして、内閣が完全に支配してまして、いろんな各省庁にしても、国会にしても、なんか裁判所の人にしても、なんか内閣府の下請け機関というかそんな感じになってるんですよね。それでやっぱり安倍晋三がやったことが一番悪いことは内閣法制局を壊したことです。
　昔本当にあのいろんな九条の問題にしても、内閣法制局が本当にガラス細工のようにして、いろんな解釈をしてそれで権力の歯止めになってたんですけど、その内閣法制局を壊してしまったこと、それがやはり一番腹立ってます。結局何故こうなってしまったかというと、選挙で自民党の一党支配がずっと続いてしまってるわけなんですけれども、その選挙法も今、このままではまた 自民党が一 党体制続くんじゃないかと思ってます。逆の立場で、野党の立場で、自民党を少しでも減らそうと思っても、バラバラになってしまってて非常にちょっとなんか残念な結果になると思ってます。その選挙のやり方にしても、最後には結局選挙に行っちゃうんですけど、選挙にしても全くあの日本はあれしちゃいけない、これしちゃいけないで、それこそ戸別訪問もできないわけだから、ね 今それもまともにできない状態ですよね 個別訪問しちゃいけないわけですから、ほんと与党と野党でもっと論戦したって言い訳ですよね。市民同士で。それも今まともにできないわけですよね。戸別訪問も一緒に行けないわけですから。本当にそこから変えていかないといけないんじゃないかと思ってます。（2：19：03）

註⑰：槇智雄『防衛の務め　自衛隊の精神的拠点』中央公論新社・2020年
初代防衛大学校長が12年間にわたって学生に熱く語りかけた講話と折々に綴った随想を収録。民主主義時代における自衛隊のあり方、そして幹部自衛官の理想の姿とは。今こそ読み継がれるべき名著、待望の復刊

武野：こういう場では議論できますよね。

●＊＊：
　自民党の人が(この場に訪ねてきても)私は野党だけどもこれこれこう思うんだよって、お互い出発点は国の将来を心配してるってことは同じなんですか、あっち行こうと、こっち行こうと、でも国のこと心配してんだからなってことで、ある意味心配してるとまで行かないまでも

武野：議論はできます。

●＊＊：
　そう、議論はできるし、国の将来心配してるんだからお互いにリスペクトを持たなきゃいけないと思うんですね。そうなればほんとうに権力の暴走とかは起きないと思うんですけどね。ちょっと理想的すぎるかな。（2：19：54）

司会：
　こう言う場で話をって言う話もあったんですけど、ちょっと私あの前に、広島の若い人たちのグループの「カクワカ」って言うんですか、 核廃絶の運動をやってる人たちの、広島の国会議員に全員にこうなんかアンケートを出して、あるいはインタビューをしてっていうことで、それを受け入れられたのが、岸田は受けなかったらしいんですけど、すごく活動が若い人たちにって、若い人たちも結構頑張ってるよっていう話のつながりなんですけど、「こっちに出てきて話してください。本当に自民党だろうと何だろう」とっていうふうなことで、やっぱり、そこであまり硬直してて言っても無駄だとか、あるいは野党もダメだとかっていうことではいけないんだろうなと思うんですね。 まあ、私たちあんまりあの選挙とか、政党的なところで、党派的なところであまり積極的に動かない方なんですけれども、それはまたそういうやり方っていうのをいろいろ作っていくっていうこと、あるいは進めていくっていうことはできるんじゃないかなと思っています。
　実際、核廃絶のためにやっている人、30歳ぐらいの女性だったんですけど、面白かったらと思ったらいろんな調査の仕方をどんどんやってですね、例えば日本の企業の中で核兵器に関わっている企業、そこに融資している銀行、金融機関が一番どういうところが多いかというのを調査すると結構わかるらしいんですね。それで一番多い日本の金融機関って何だと思います？銀行？三井とか、三菱とか考えますよね。一番は「ゆうちょ銀行」ということです。他に比べてダントツに融資が多いと言うことで。本当にびっくりしたんですけどね、確かにあそこ政府の出先機関ですから一番使いやすいところなんですよね。ほぼ民間だって顔をして、そういうことを調べてみれば、インターネットで ある程度検索してって、インタビューしてっていうことでわかるみたいなことがあって、あーなんかやっぱり若い人の調べ方ってあるんだななんて思って、他にもいくつかあったんですけれども今度機会があったら話に来てっていう感じでお願いしますけれども。
また次の機会 よろしくお願いします。 他の方にも声かけていきたいと思います。メールアドレスさえ分かれば案内します。ありがとうございました。　（2：22：54）

【参加票等に寄せられた言葉】
●H.H.
映像の力信じています。映画を通してまた観た人の感想を言い合える時間を作ってください。

●K.S.
いろんな活動している人の話、参考になった。1人5～10分で話してもらう方法。（人数にもよる）考えはちがっても聞く

●M.K.
恤兵ということばが、僕にとって目から鱗でした。
80年前には普通に使われていたのに死語と化した。
「抹殺された日本軍恤兵部の正体、この組織は何をし、なぜ忘れ去られたのか？」押田信子 扶桑社新書304 2019年7月1日
恤兵は国民の熱から生まれたもの。熱を支え、加速化させていったのは愛国心、いやそれ以上に国民の出征兵士に寄せる情である。
戦時動員としての恤兵は「下から」の動員と「上から」の動員があった。「下から」は一般民衆の自発的・主体的な戦争支援であり、「上から」は国家総動員法公布（昭和13年）から、あらわになった強制的な動員（統制）体制である。
この法の流れを組んで、誕生した興亜奉公日は実施項目に「戦死者の墓参」と並んで、「前線に慰問文・慰問袋を送ること」を加えた。下からの動員が上からにすり替わった瞬間である。システムにメディアが加わると、同調圧力が高まり、上からの強制に抵抗できなくなるのは過去の戦争がいやと言うほど教えてくれる。…
恤兵という亡霊を今の時代に蘇らせないために、我々は何をなすべきか、いや何をなさざるべきか。そのためには過去を直視し、そこに表れている事象、言説を自ら検証し進むべき道を選び採るべきだと思う。
以上は本書あとがき（おわりに）からの抜きがきです。
当日（1/20）の手元資料に鷺田清一の折々のことば。「どこの国が悪くてはなくて、戦争そのものが間違っている。（磯前順一の祖母）と蟻、そのコメント…歴史を顧みれば、同胞意識というのは、不定型ながらも、想像以上の「仲間」に入らない人たちを排撃する…。とあるのはまさにヘイトスピーチする在特会のことか思いました。
恤兵という下からの動員を支える熱情もまた同根ではないのか。そうなってしまう一番の原因は「貧困」ではないのか。
同じ押田信子さんの『元祖アイドル「明日待子」がいた時代』育鵬社2022年8月は1931年に新興の町・新宿に開館し軽演劇やレビューを上演して、学生や知識層の人気を集め多くの作家・俳優を輩出して、1950年に閉館したムーランルージュで僕は熱読、すっかり真知子のファンになってしまいました。おすすめです。

資料⑫　「むのたけじ反戦塾」これまで

2022年3月21日（休）
むのたけじ 地域・民衆ジャーナリズム賞 受賞の集いプレ・イベント「映像とお話の会」
■参考映像『**むのたけじ100歳の不屈 伝統のジャーナリスト 次世代への伝言**』
■**お話：今に生きる『たいまつ』の姿勢と思想　佐高信さん**

2022年8月21日（日）
戦争はいらぬ 戦争をやらぬ世へ―むのたけじと考える憲法
- **番組上映『まだ101歳むのたけじ―戦争を殺す日まで』**
- **「いま戦争と改憲の危機に私達は何をどのように闘うか」 佐高信さん 中垣克久さん 愛敬浩二さん 阿部美砂さん**

2022年10月10日（休）
「むのたけじ反戦塾」設立準備会
- **『笑う101歳×2 笹本恒子 むのたけじ』上映**
- **河邑厚徳 監督のお話**

2022年12月18日（日）
第1回むのたけじ反戦塾
❶ むのたけじ著『**希望は絶望のど真ん中に**』
❷ 参考映像『**NHKスペシャル「日本人はなぜ戦争に向かったのか」**

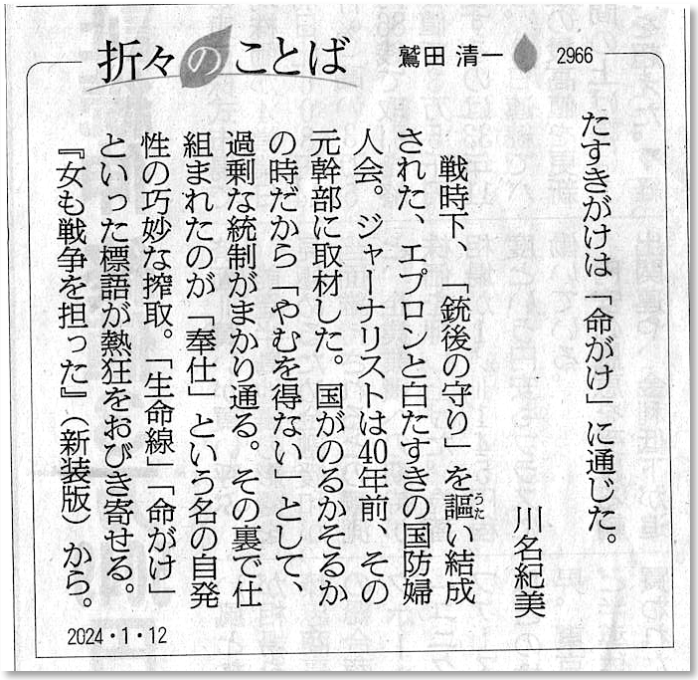
2023年3月12日（日）
第2回むのたけじ反戦塾
❶ 自己紹介（それぞれの考えを出し合う）
❷ むのたけじ著『**希望は絶望のど真ん中に**』第1章「**現在を刺す七〇〇万年の歩み**」から
❸ 参考映像　『**100歳、叫ぶ 元従軍記者の戦争反対**』

2023年7月6日（木）
第3回むのたけじ反戦塾
❶ 自己紹介（私の考え）＋むのたけじ著『**希望は絶望のど真ん中に**』第2章「農耕の中からなにゆえ戦争が」前半
❷ 参考映像『**100年インタビュー　ジャーナリスト むのたけじ**』前半

2023年8月26日（土）
第4回むのたけじ反戦塾
❶ 参考映像『**100年インタビュー　ジャーナリスト むのたけじ**』後半
❷ **むのたけじ著『希望は絶望のど真ん中に』**
❸ **それぞれが今考えていることの出し合い・話しあい**

2023年11月23日（木･祝）
第5回むのたけじ反戦塾
❶ 参考映像**「むのたけじ100歳のつどい『ジャーナリズム・メディアの再生～戦後70年・未来への課題』**（66分）2015年4月制作
❷ **参加者、それぞれが今考えていること、問題としていることの出し合い・話し合い**
❸ **むのたけじ著『希望は絶望のど真ん中に』第三章「人類の余命は四〇億年か、四〇年か」から**
❹ **「むのたけじ反戦塾」の新しい展開をめざして**

2024年1月20日（土）
第6回むのたけじ反戦塾
❶ 参考上映：秋田県立秋田明徳館高等学校PTA主催特別企画**「99歳のジャーナリストむのたけじ先生講演会『若い人達に伝えたいこと』**（108分）講演：2014年3月10日
❷ むのたけじ著『**希望は絶望のど真ん中に』第4章「みんなの課題にみんなで取り組む」**前半 P.123~143
❸ 参加者、それぞれが今考えていること、問題としていることの出し合い・話し合う



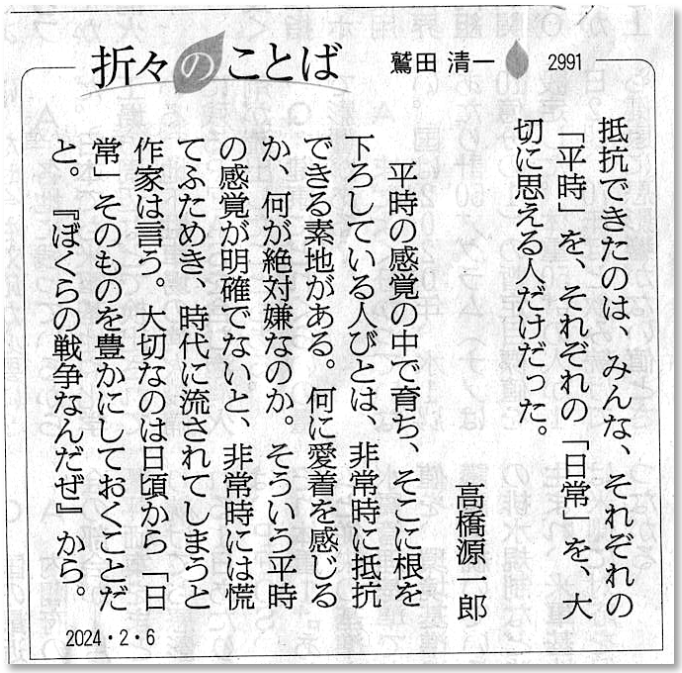
折々のことば　鷲田 清一　2966

たすきがけは「命がけ」に通じた。

川名紀美

戦時下、「銃後の守り」を謳い結成された、エプロンと白たすきの国防婦人会。ジャーナリストは40年前、その元幹部に取材した。国がのるかそるかの時だから「やむを得ない」として、過剰な統制がまかり通る。その裏で仕組まれたのが「奉仕」という名の自発性の巧妙な搾取。「生命線」「命がけ」といった標語が熱狂をおびき寄せる。『女も戦争を担った』（新装版）から。

2024・1・12



折々のことば　鷲田 清一　2991

抵抗できたのは、みんな、それぞれの「平時」を、それぞれの「日常」を、大切に思える人だけだった。

高橋源一郎

平時の感覚の中で育ち、そこに根を下ろしている人びとは、非常時に抵抗できる素地がある。何に愛着を感じるか、何が絶対嫌なのか。そういう平時の感覚が明確でないと、非常時には慌てふためき、時代に流されてしまうと作家は言う。大切なのは日頃から「日常」そのものを豊かにしておくことだと。『ぼくらの戦争なんだぜ』から。

2024・2・6

［Memo］

むのたけじ反戦塾
〒338−0006　さいたま市中央区八王子
4-7-10-201
(問合せ先)TEL:090−4599−5314
E-mail:dmuno@jcom.home.ne.jp

資料⑫　「戦争いらぬ やらぬ世へ」自衛隊派遣の是非について　(2)
(5)

＊28ページから24ページに遡る形で、後ろから左開き
上段右上から左上、下段へ進む形でお読み下さい。

を返したでしょ。今度も余りにも彼らの言うところの「テロ」がひどいから三〇〇〇の精鋭をぶちこむっていうんでしょう。ゲリラがいかに怖いものであるかをなぜブッシュは学ばないのか。

小泉は有事法制以来言葉でごまかしてきて、今度の場合でも「人道支援だ。国際協力だ」と言っている。しかし、実際にはブッシュに対する義理を果たしているだけだ。自衛隊をやるんでも〈イラク支援法〉の中で、戦場の中でも戦闘の起こらない安全なところにやるっていうんでしょう。「ここは戦闘で危ない。同じイラクでもここは命が助かる」そういうペテンを我々に見せたんじゃないですか。

もっとひどいのは、今度の国会でやっている〈国民保護法〉だ。北朝鮮かどこかから爆弾落とされたら我々の生命・財産を〈国民保護法〉で守る。それを都道府県知事の責任でやらせるんだそうだ。戦争というのはそういうものでないでしょう。そんなことできますか。

昭和二〇年三月一〇日、私はあの空襲の終わった後、ほとぼりの冷めない焼け跡を新聞記者として歩き回りましたが、あの浅草界隈から向島界隈まで一夜にして一〇万の人間が骨になったんですよ。それが戦争だよ。それを都道府県

知事が守ってくれるなんて童話にもならないことを今持ち出して、何でこんなに国民をたぶらかすのか。

理由は明白でしょう。小渕、森、小泉、この三人から有事法制が出てきた。戦のできる日本にしたいということなんですよ。平和憲法がこのままでは戦ができない。それでイラクに自衛隊をやる。誰も死なずに帰ってくれば我々国民は、「ああ、よかったじゃないか。国際協力やった」こう言うでしょう。海を越えて何万キロもやるんですよ、自衛隊を。それが自衛になるんですか。とにかく日本人の感覚を麻痺させようとしている。

予定によれば二〇〇五年、二年後に憲法九条の骨抜きをする。そのために中曾根みたいなものが命を賭けてやっているんでしょう。そういうのが現実だというのを我々は見抜かなければなりませんね。

我々は人の命を、わが子でなくても誰の命であろうとも、そういうことに投げ込むことはできない。憲法九条に言うように、国際紛争を解決する手段として戦はやらない、永久にやらない。悶着のあった時は、正義と秩序を基調として仲良くこれを解決することに努力する。これは人類最大の財産ではないですか。それだけ貴重なものを、三〇〇万の日本人を死なせ、何千万のアジア人を

殺した代償として、我々が平和憲法に結晶させたんでしょう。それを今になって反故にしようとする企みなんです。しかしこれは急に起こったことではない。

満州事変からポツダム宣言受諾まで

それで本題に入りますが、事務局の方からこのテーマをいただいて顔が真っ赤になった。だってそうでしょう。今頃になって「太平洋戦争の本質は何か」を言わねばならないということは、曖昧だったということでしょ。あの戦争の時、大人であった大正や明治の人間は、重大な問題をいい加減にして、そのままほったらかしにしてきたということじゃないですか。それから世の中がおかしくなってきているんでしょう。世の中、壊れに壊れてしまっていますね。

いろいろ理由があると思うが、大きな原因は昭和二〇年八月一五日戦争が終わった時、我々がやった戦争、一五年戦争は何だったのか、ドイツ人がナチスの残党狩りをやったように我々もやらなければならなかったんです。東条英機は一体何だったのか。それを連合軍の極東軍事裁判に任せて何もやれなかった。

それは後で言えば、敗戦後生きることに夢中でそんなことをやっている暇はなかったというけれども、そうではない。やっぱりやれなかったんです。やる力がなかったんです。普段鍛えておかなければいざとなったときに力が発揮できない。我々はよく「いざとなれば俺だって」こう言います。しかし普段からやっておかなければいざとなれば尚できない、しみじみ思う。

だから私はこの勉強会というのは日本の宝だと思うんです。今からやっておかなければ二、三年で大変なことになるからです。もう遅いかもしれないがやらなければならないんです。それを湯沢の方々が実行なさった。大変な歴史的出来事だと思っているわけなんです。

太平洋戦争というけれども、昭和六年、一九三一年の満州事変からポツダム宣言受諾までの足掛け一五年がこの度の戦争です。

これを肯定する側の時の軍部とか政府は大東亜共栄だと言って、「近隣のアジアの国々と仲良くして一緒に栄えましょう」こういうことだったんです。そして日本が負けて時がたち、テレビ朝日などで右翼みたいな人や自民党の右派の人が、「あの戦争はよかった。日本が戦をやったおかげで、インドネシアもフィリピンも独立してありがたいと思え」こういう論法ですね。ところがそう

＊28ページから124ページに遡る形で、後ろから左開き上段右上から左上、下段へ進む形でお読み下さい。

て意見を出し合う。一年をかけて本当に人間が喜びを感じる、将来に希望を感じる、そして居住している場所に家庭生活に地域社会にもりもりと元気が出てくる、そういう思想と実践のエネルギーをつくることを全員で頑張っていきたい。

自衛隊派遣の是非について

はじめに、当面する事態についてということで申し上げます。それは言うまでもなく、イラクに自衛隊を送るかどうかということでしょう。昨日の報道を見れば陸上自衛隊はとてもやれないから、飛行機部隊を先にやって次に軍艦を出して、やや安全になったら陸上自衛隊をやるような話です。

ところが今大事なことは、マスコミの世論調査でイラクに自衛隊を送るかどうかを問うたら、どの調査でも八割は危ない、日本の若者を死なせにやる必要がない、これが大部分の国民の声だということです。

二、三日前に東京から電話がかかってきました。東京の朝日新聞かどこかの報道機関が「日本の国際協力」というテーマでシンポジウムを開いた。パネリ

ストが六人で、その中の緒方貞子さんにある人が「緒方さん、あなたは国連の仕事をやっておられますが、文民の方やボランティアの方がイラクで働いていて、生命の危険にさらされるとき、あなたが責任者の場合はどうしますか」と質問したそうです。そしたら緒方さんは「人道協力も何もない。いのちの奪われる危険なところに日本人をおいておく必要はない。さっさと日本に返します」そう言ったそうです。そうではありませんか。大事な日本人のいのちを何で危険を冒してまでイラクにやる必要があるんです？

大量破壊兵器があると言って、二〇万の軍隊をつぎ込んでも、フセインのつくったといわれる大量破壊兵器は何にも出てこないでしょう。何のために戦をやったかわからないでしょう。今出てくる問題というのはブッシュ政権の根拠のない軍事行動に対する反発でしょう。

ですから、なぜそこで日本人の生命を危険にさらさねばならないのか。これほどわかりやすい理屈はないでしょう。平和憲法どうのこうのと言う前に常識の問題でしょう。八割の国民が心配をしていても、小泉内閣は当初の計画では一〇〇〇人ないし一五〇〇人の自衛隊を送ると言う。これは一体何なのか。何をものがたっているのか。これに対してきちっと正しい認識を持たなければ平

和運動は前に進んでいかないのではないですか。

まずわかることは、ブッシュは全然歴史に学んでいないということです。九月一一日、テロ。あれはおかしい。私は新聞記者をやっていた経験で思うが、あれは同時多発テロではないわけだ。現代の社会用語で言えばゲリラ戦争だ。要するに、圧迫された弱くて小さな勢力が、強大なものと戦うときに奇襲作戦の形でやったその戦いだ。レジスタンスなんです。

ああいうことは絶対許されない。残虐非道ですよ。三〇六九人の罪のない人を一瞬にカスミのようにして消した。残虐非道であればあるほど、なぜこれをやったかということをその人たちが出てきて、最後に裁きを受けるにしても、身の危険なしに堂々と人類に向かって言わなきゃいかんでしょ。それを言わせるのがアメリカの言う正義じゃないですか。それが自由じゃなかったですか。

それを頭から恐怖だ、悪者だ。原因があるからアラブの人たちはあのようなことをやるのではないですか。その原因には触れないで、とにかくアルカイダやフセインを悪者だと決めつけている。

私は二〇代からイスラム教を勉強して来ましたが、川口大臣や小泉が「テロが怖くて自衛隊を送らないなんていうことは日本ではない」と言っていました

が、「ああ、危ないな」と思いましたね。どこかで日本人が懲らしめに遭う。と思ったら案の定二人の外交官がやられたでしょう。もう世界では彼らの無残な惨殺死体を全部写真で出しているでしょう。今日発売の週刊現代に載っている。それを外務省は二人の人権を無視したどうのこうのと言って裁判でもやるようですが。

しかし聞いてみれば二人の外交官は丸腰で自分で運転してあるいていた。それだけ日本人は安全だったんです、アラブでは。名の通っている大国の中でイスラム教徒に圧迫を加えたり、悪いことをしたことのない国は日本だけだったんです。だからあの二人の外交官は日本人であることを安全パスポートとして歩いていたんです。

それを小泉内閣がアラブの人々の神経を逆なでするようなことをやったから惨殺、懲らしめられたんですよ。我々は他人のことだから黙って見ているけど許されないでしょう。そうではないですか。それをどう思うのか。

アメリカはベトナム戦争の時にあれだけ戦って、最後には二万の海兵隊が袋のねずみみたいに押さえられて、「これを皆殺しにしますか、それとも助けてあげましょうか」と言われ、大使館も何もぶん投げて二日間で二万人の海兵隊

＊28ページから24ページに遡る形で、後ろから左開き
上段右上から左上、下段へ進む形でお読み下さい。

マに取り組んだ。まず地域にある五つの高校の生徒を対象に「学校を卒業したあと地域で働いて、ここで生きていくことを望むか」とアンケートをやった。六割の生徒が「できればここで働いて生きていきたい」と答えた。それならば私たちの将来の子どもたちも町に住みたいと望むだろうと、「私たちが三六歳になった時、私たちの長男あるいは長女が今の私たちと同じ年頃になるだろう。その子らに喜んで働ける職場を用意しておくには何をどうすればよいか」をテーマにして地域経済の開発方針に取り組んだ。地域の行政機関や産業団体などを余さず調査して回ったが、どこでも努力しているが相互の結び付きがバラバラのため効果が上がっていない。女生徒らは人々がタテにもヨコにも出来るだけ協力する組織を心がけようと、あれこれとテストした活動を種々の行事に持ち込んだ。その報告を文部科学省主催の「高校家庭科クラブ研究コンクール」に出したら、県代表から東北代表へ、そして全国で二位と評価されたという。

一八歳の娘たちが一八年後の自分たち親子の姿を見すえて、郷土の開発に自力で取り組み始めている。大人たちは肩書きを振りかざして、地方分権だ、いや地域主権だと空論を重ねている。だから、若者たちは大人に対して心の扉をたやすくは開かない。どう

したら開くか、開いたらどうなるか、実に素晴らしいことを私は教えられた。次にそのことを聞いて下さい。

中学生そして高校生たちとの初対面の時、ぎこちないのは三分間ほどで忽ち打ち解けて、お互いにまるで同級生みたいな言葉のやり取りになった。私はびっくりした。子ども時代の私は、大人には近寄れなくて初対面の大人にはものを言えなかった。しかるに現在の生徒さんたちは、自分たちと他人との間に何の敷居をも意識しないらしい。そうです。今の若者たちの素肌の心情では、人間対人間の関係は人間オンリーです。家柄や貧富、学歴、肩書き、年齢差なんかで人と人を比較したり区別したりはしない。

ある時、中学生たちと私との対話集会の様子を朝日新聞が記事にしていたが、見出しは「八〇の年齢差を越えて、同じまなざしの輝き」と見出しをつけていた。確かに生徒たちは一四歳で、私は九四歳でした。これほどのへだたりがあるのに、なぜそれを感じさせない付き合いになるのか。あるとき私が「そのうち君たちは、私をムノクンと同級生みたいに呼びそうだね」と言ったら、男の中学生が応答した。「ぼくは大人に心を開いたことはない。むのさんに会って初めてのことを経験した。親は、自分は親でお前は

子どもだと言った。先生は、私は教師でお前は生徒だと言う。近所の大人は、おれたちは大人でお前らはガキだと言う。大人たちの声は、いつも上から下へ斜めに走ってきた。むのさんに会ったら、両方の声が同じ高さで行き交う。だから安心して、自分をさらけ出してものを言っているのですよ」と。

この声を聞いた途端に、私の脳裏に稲妻のように想念が走った。私は発見した。何を？　二人の人間が少し離れて立っている光景を思い浮かべよう。両者は、どんな関係を持ち得るか。(一)離れたまま立っている。(二)利害が対立してケンカする。(三)利益が一致して仲よく協力している。(四)対立しているが争わず折り合っている。この次はないか？　あります。(五)両者には相違や差異、そして対立もあるから、だからこそ打ち解けて仲良くできる。中学生、高校生と私との間には幾つもの大きな差異や対立もあろう。それを両者とも知っていて、認め合うから仲よく語り合えるのです。

立場や素質や利害その他が違っていたり、対立したりしているから、だからこそ理解し合って連帯し合作できる。これこそは、人間の働きでは最も次元の高いものであろう。そのエネルギーこそが、その思想こそが新しい世界、新しい人類社会を創っていくであ

ろう。現在の二〇歳以下の若者たちは、すでにその能力の素質を持っている。そのことをすでに自覚している若者がいるかも知れないが、大部分の若者はまだ感知していないだろう。しかし、やがてすべての若者が自分のそれに気付き、その思想とエネルギーで素晴らしい開拓の仕事を展開するだろう。なぜ日本の今の若者たちが新日本人と言いたくなる素質と能力を身につけたか。歴史の力、まさに歴史そのものですね。

戦後すでに六六年だ。憲法の平和宣言は日米両国の軍事同盟ゆえに歪められてしまった。けれど、相互に人をたくさん殺し合う戦争で民族の手を汚さないできた。絶対服従の徴兵制度も軍事訓練も、そして奴隷の道徳を強要する「忠君愛国」「義勇奉公」も消滅させられてきた。これらの現実は、明治や大正や昭和二〇年までの当時には全くなかった世の新しい風土で、それが現在の若者たちに新しい人柄を育てたのだ。

歴史は、出来事の過去帳なんかではない。波だ。歴史は生きている波だ。行けば帰って、帰ればまた行く。ヒストリー・パワー＝歴史の力はストレートに正直だ。だから、希望は常に絶望のど真ん中の、そのどん底に輝いている。前夜がつらいと、必ず朝明けはそれだけあたたかい。

＊28ページから24ページに遡る形で、後ろから左開き
上段右上から左上、下段へ進む形でお読み下さい。

の次の時代の発展はこの人民公社の単位が元となっているように見えます。だから、地域主権に根ざしたこうしたコミュニティーの評価はもう少し時間をかけるべきだし、今後、人類が人間組織そのものの改造を求める時、きっと、人民公社が参考材料として学び直されるだろう。

足元の日本でも土に根ざした社会構造の良さを認識させる出来事を見かけます。幼児たちの田仕事のニュースを、あなたは耳にしませんでしたか。中学生や小学生ではない、六歳未満の幼児たちが田んぼに稲を植えて、やがて実りを刈り取って、その米で御馳走を皆で食べて喜ぶ行為が数年前から全国各地で、点々とではあるが増えていることに気付きませんか。私はかつて農村問題の学習会で全国各地へ出かけた経験から今でも各地からの情報を受けているので、気が付いたのです。

無論、この動きの背後には幼稚園、保育所、農業協同組合や地域の父母たちの配慮があってのことですが、大人たちに導かれて小さな手で苗を土に挿したり、小さな鎌で稲を刈ったりする時の幼児たちの喜びようは大変なものだという。幼児たちは喜びの作業を重ねながら、自分たちのやがて営む社会生活の組み立てや働き方の構想を耕している

のであるまいか。そして大人たちに、「無縁社会」はこうしたコミュニティーに造り変えることで克服出来ることを示しているように思えます。

では、次に幼児たちではなく、中学生と高校生たちと出会って、老人の学んだことを語ります。

八〇の年齢差で同じまなざしの輝き

八〇歳代の半ばだった私が、曾孫（ひ）に当たる世代と語り合い学び合える機会を持ち得たのは、文部科学省が「ゆとり教育」を打ち出して、中学生や高校生に地域産業の見学や大人との対話などを進めたからでした。この方針は五年ほどで打ち切られたが、当初、私にも居住地の中学校や高校が協力を求めてきたので引き受けた。生徒たちのわが家への来訪に始まって、私が学校へ出掛けて行ったり、公民館での座談会や講演会で一緒したりした。そして日本列島に新しい日本人が生まれつつある事実を教えられた。

私が居住地（秋田県横手市）の若者から感受した印象は、その後にいろいろな機会に気をつけて念を押してきたが、日本じゅうの同年代の若者に共通していると思うのです。

態度はさわやかにさっぱりしている。けれど、内面は単純ではない。各個人の個性を強く感じさせると同時に、同一世代ゆえの共通の性格も強く感じさせられる。

私がまず驚いたのは、若者たちの自己表現が余りに地味で控え目に思われたことだ。私に会いに来た高校生は一年生の男女グループで、小説家や漫画家、アナウンサー、映画制作者などを志望しているそうで、そのために何を心掛けて学ぶべきか、といった地味な事柄ばかりが質問状に並んでいた。中学校から来たのは一年の女生徒ばかりで、用意してきた質問はやはり地味でした。しかし、若者たちと語り合いを進めて、私は妙な気分になった。若者たちに「もっと夢を大きく持ったら」なんていう資格も必要も私たち旧世代にはない、と気付かされた。今の若者たちは自分らの血液型で、自分らのリズムで、自分らの夢を、希望を育てている。それは旧世代人たちには理解しがたいものになっている。それどころか、若者たちとの語らいが進むにつれて、私たち旧世代とはハッキリと違う新しい日本人が登場しつつあると思い知らされ、私は裁かれる身の快感のようなものを感じた。

まさに〝戦争世代〟の私どもですが、戦争そのものに対しては一片の意見も選択も決

定も許されず、一切を戦争に投入させられた。そして一九四三年春からの二年間、すべての戦場で敗北が続いたのに、国民の誰ひとりとして政府や軍部に対して「これからどうする？　どうするつもり？」と問いかけることもなく、最もみじめな敗北に行きついた。

私たち旧世代人は行き詰まると「ケ・セラ・セラ（スペイン語で、なるであろうことは、なるだろう）＝なんとかなるさ」とごまかし、「日本は神の国だから神風が吹いて助かるだろう」なんて自己欺瞞をやってきた。いまの若者たちは、そういう民族病をすっぱり切断した。何がそうさせたか、についての私の判断はおしまいに述べる。その前に、いまの若者たちと旧世代との差異をもっと見つめて下さい。

若者たちとの付き合いから私の学んだことをもう二つ、ぜひ紹介したい。今の若者たちの自分たちのコミュニティーに対する思い入れが、こんなにも熱いとは知らなかった、という驚きが一つです。

中学一年の時に私を訪ねて来た女生徒たちが、高校三年に進んだ時に、女生徒ばかり一五人の家庭科のクラブの活動で「地域の経済をいかにして発展させるか」というテー

＊28ページから24ページに遡る形で、後ろから左開き
上段右上から左上、下段へ進む形でお読み下さい。

血縁や地縁を超えた人間関係へ

ここで若者たちと私との出会い体験を語るところですが、その前にもう一つ生活協同体＝コミュニティーの在り方について私の判断を参考に聞いてほしい。

近ごろの社会状況を「無縁社会」と形容して嘆く声がしきりですが、青息吐息をストップさせるには、過去へと今後へと、両面をしっかと見つめなおさないといけないのではありませんか。

まず過去のことですが、血縁や地縁や職場のつながりなどが皆ばらばらになったその姿は、まさに一九四五年の夏のあのとき――一九三一年の「満州事変」から始まった十五年戦争のあとの日本社会の姿でした。死んだ同胞は三百数十万と数えられたが、その何倍もの男たちが戦争へと駆り出され、夫婦・親子・兄弟・親類の絆はコマ切れにされ、助けたくても助けることが出来ず、助けてもらうことも出来なかった。そして隣近所の付き合いは隣組や警防団や大政翼賛会の下部団体に組み込まれて、消火のための水のバケツリレーや竹やり訓練などに女性たちも動員された。隣近所での助け合いの上に相互

監視が加わった。生活物資の配給制度は、人間関係を一層ささくれ立ったものにした。

八月の降伏の日を、日本人はそういう姿で迎えた。

すぐに着手するべき課題は山ほどでしたが、特に大切なことは二つでしたな。一つは戦争の開始から降伏まで全過程を日本の民衆自身の手で明らかにして責任の所在を抉り出すこと、も一つは戦争で迷惑を及ぼした国々の人たちへの心からの詫びと日本人自身が出直すためのケジメをつけることでした。実際には、日本人が自分でやるべきことを外国の軍事政権の手にゆだね、国民は日ごとに生きる手立てのため、ばらばらに動き続けた。

それでも、あの一九四五年の盛夏から一九六〇年の初夏までの一五年間の日本の民衆の生き方は、もっぱら自分個人や自分の家族を守るためだけのあえぎみたいに見えたが、時代の波はとらえていた。だから、「日米安保体制は危ない」と三三万人で国会議事堂を囲んで抗議を叫び続けた。それが挫折したら、民衆のエネルギーは権力側の「所得倍増」というスローガンに利用され、そして、「敗戦国の奇跡の経済復興」となりました。

しかし、歴史はごまかせない。歩みの足の下に、やるべきことをやらなかった空洞があった。高度成長のうま酒を飲まされて程なくバブル＝水泡のしっぺ返しを食らった。現在の「無縁社会」の喘ぎは、戦中の社会荒廃が戦後の他力依存プラス責任転嫁という主語喪失の人間の生き方で荒廃を深めた光景なのだ。

それで、どうする？　昨日あるいは一昨日にやるべきことをやらなかった報いは、今日から明日、明後日に向かって開墾作業で満たすことだ。それなら出来るし、それ以外には手立てはない。何よりも問題の根っこを深く見つめることだ。

現在の「無縁社会」という嘆きは、過去と今後を結ぶための忠告、すなわち新しい「有縁社会」を生む合言葉として受けとめるべきでないか。血縁や地縁は人と人を結ぶ絆として今後も過去と同じく大切に決まっていますが、それだけでは間に合いません。これからの世の営みでは、血は全くつながっていなくても家族や親類と同じく力を合わせる人間関係をつくらなければなりません。住所や職場が遠く離れていても向こう三軒両隣と同様に結び合う人間関係が求められているのではありませんか。そうしないと人類のぶつかっているテーマには対処できない。これまでになかった人と人との結び付き

で協力すれば、立ちはだかっている問題を克服できるのではないか。

社会の構造を土台から組み立て直す試みが、実際に一九七〇年代の中国で進められていた。その実情を私は見たので、ここで紹介しよう。「プロレタリア文化大革命運動」の中での「人民公社」です。日本の二八・三倍もの国土に住む一〇億の人々を一単位が二万人ずつの公社に組み直して、国防と外交以外の国家行政はみなそこにゆだねるというものでした。私が見た時は、始まったばかりの模索の段階でした。例えば農機具を造る工場は全国一律ではなく、公社ごとにそこの土質、気候や労働力などを考えて、その土地にぴったり合ったものを造ろうとしていた。二万人というのは、そこのメンバーたちの日常の接触でお互いに相手を仲間と感じ取れる範囲の限界ということでしたが、その中での結束を深めるために、例えば学校では学生・生徒と教師を「学員」と「教員」と呼び、対等で合作を深めようとしていた。行政担当者へのモラルの要求は特にきびしく、知事クラスの行政官でも、数年おきに無位無官の農民として公社で一年ないし半年を農作業してから元の地位に帰らせていた。

この人民公社は鄧小平らの「走資派」の改革開放路線の中で消えていくのですが、そ